
アンノウン・エンジェルズ

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンノウン・エンジエルズ

【NNコード】

N8547A

【作者名】

雨月

【あらすじ】

アンノウン・エンジエル

罪人天使の時雨は神様の野望を阻止して人間界に帰つて來た。しかし、彼が休めるところはあまりないのである！今回で多分最後となる時雨の生活にご注目！

そのいちーー！　シンシン魔女が猫を被ると劍治はながされる？

魔界から帰つて来て数週間が過ぎた。学校に行つてみると別段欠席扱いにもされていなかつた。（千夏姉さんが頑張つてくれたらしい。）今日はいたつて平凡な一日のはずが凄い事がおきた一日だつた。まず、朝。いたつて普段とかわらない。

「時雨殿、朝だぞ！」

最近よくシャドさんと一緒に起られる。

「あ、うんねばよひシヤーさん。」

そして隣には薔薇が寝ている。（夜はいないが朝になると必ずここのだ。）僕は薔薇を起こす。

「ほら、
蕾朝だよ。」

「そうだ、蓄殿朝だ！」

「うーん、わかつたよ。おはよう兄様、シャドさん。」

シャド WAN の事は美奈さんにも話してある。部屋の扉が開き、美奈さんが入ってくる。

「みんな起きました？今日は林檎が並んでます！」

林檎と聞いてシャドさんは消え、蕾も走つて行つた。そして美奈

さんも部屋をでていった。

「・・・千夏姉さん、でてきて大丈夫だよ。」

壁が剥がれて千夏姉さんが登場。（この前忍者のテレビを見たら
しい。）

「時雨おはよう。やつぱつ壁に寝るのははつきりこしてんじゃ。」

僕が戻ってきてから千夏姉さんはみんなにばれないようにしてき
たがそろそろ限界みたいだ。

ある日は天井から飛び降りてきたり、床からでてきたりしていた。
(その他にも机の引き出しからでてきたりしていた。)

「・・・時雨、正直ネタがつきた。そろそろお前の身体に戻る。」

あつさり消えてしまった。まるでお化けだ。

本当は剣治が新しい身体を千夏姉さんにあげる約束だったらしい
が執事さんにはれてしまい駄目になつたそうだ。ほとんど聞いた話
だから本当かどうかわからないが多分本当であつていい気がする。

僕も朝食を食べに行くと途中で執事さんに会つた。

「時雨様、おはようございます。」

「おはようございます。」

近頃の日課である。いつもやつこつたら仕事をしてビックリに行く
のだが、今日は違つた。

「・・・今日は大変な一日になるかもしません。」

「大変な・・・一日?」

聞き返したが執事さんは頭を下げ、去つて行つた。考えていても仕方ないので朝食を食べにいく。第一次林檎の取り合い合戦が行われており、未だに決着はついていないようだ。

「薔殿、悪いが貴女の林檎は私がもらおうか?」

「貴女にあげれる林檎は毒林檎だけよ!」

睨み合う二人。それを眺める一人のメイドさん。

「早く食べないと遅刻しますよ?」

「うーん、確かに大変だ。」

「・・・・一人とも、僕の林檎をあげるから早く食べててくれよ。」

「一人の胃袋という海に僕の林檎は消えた。帰つてくる」とはないだろう。

「行つてきます。」

学校に向け薔と一緒に歩く。薔を見てなかつたからか身長が少し高くなつたようだ。

「兄様、今度一緒にどこかいきません?」

「薔は田をキラキラさせながら僕に聞いてくる。

「うん、どこがいいかな? 薔は何処に行きたい?」

「ここで魔界、天界、地獄と言われたら僕は断る事が出来るだろ？か？だが、薔はいたつて普通の答えをだした。

「水族館はどうかな？」

「ああ、いいよ。」

ガツッポーズする薔を見ると心が和む・・・事はないな。目が燃えている。しかも喋り方がおかしかったような・・・。じーっと薔を眺めていると顔が赤くなつた薔に叩かれた。

「・・・兄様、そんなに見られたら照れるよー！」

ぱしつ！

「「めん。」

そんなやり取りをしていたらもう少しで学校である。何度見たつてでかい。大体車が廊下を走るのはおかしい事ではないのだろうか？さつきからリムジンが行つたりきたりしているし、SPみたいながつしりしたサングラスの男達がうろうろしているような気がする。

「薔、今日なんかあるの？」

「わからない」とは他人に聞くのが一番だ。

「えーとね、偉いとこのお嬢様が転校してくるんだって。」

僕たちがきたときはこんなことしなかつたような気がする。

「でね、魔女なんだつて。古代魔法も使える程の腕だつてよー異名は兄様みたい名前だつたけど忘れちやつた。」

「ふーん、魔女ねえ。」

魔女＝高飛車な知り合い。

「僕の知り合いに魔女ならいるよ？少し性格が悪いけどね。」

「へえー凄いな。今度紹介してー！」

彼女は只今魔界で仕事します。

「・・・まあ、会えたたらね。」

「やれやれ、時雨君朝から妹さんと仲良くな登校かい？」

剣治が白馬に跨がつて登場。なにやつてんだこの生徒会長は。

「・・・剣治、今すぐ馬からおりてくれないか？」

恥ずかしいなあ。薔なんか走つていつたよ。

「ふつ、わかつたよ。君の頼みだ。」

馬は走つたり、どこかに行つてしまつた。

「逃げたけど大丈夫？」

「大丈夫、家に帰つただけぞ。」

・・・・・犬じやあるまいし。

「今日は転校生がやつてくるよ。聞いたかな？」

「うん、魔女だつて聞いたよ？それも凄腕魔女らしいね？よくわかんないけど古代魔法とやらも使えるそうだね。イクスさんとどっちが強いかな？」

剣治はニヤリと笑いながら答えた。

「同じだと思ひつよ。」

教室は大騒ぎ。ハデスに話し掛けるとハデスも嬉しいみたいだ。
「おにーちゃん転校生だつてよ！」

「うん、そうだね。」

このハデスは本物であつてほしいな。ハデスは話題を変えて魔界での事を話してきた。

「おにーちゃんベリルに勝つたんだつて？」

「うん勝つたよ。」

ハデスが指を鳴らすとがたいのよろしい男の人ワゴンを押して入ってきた。静かになる教室。無理もない、ワゴンの上には沢山のオレンジジュースが乗っているからである。

「おにーちゃんにプレゼント！』

たーんたーんたーんたーんたたたたんたんたーん

そんな音楽が流れるなか、ハヂスは僕に大量のオレンジジュースを渡してくれた。渡される瞬間、教室から拍手が鳴り響いたのがなんとなく凄いと思った。（拍手をしている中に先生までまじっていた。）

オレンジジュース授「式」はじめやかに行われ、次のプログラムに移った。

教室の前に先生が立ち、転校生が来た事を告げる。

「えー、みんなには黙つていたが今日から新しく仲間が増える。」

あれだけリムジンやらグラサンの男の人があつてたら普通変に思わないだろ？

「外国人だ。名前はイクス・リベナ・マッカローーさんだ。イクスさん、入つて来てください。」

へえーどうかで聞いた名前だなあ。

ガラツ！

何となくシンシンしているような雰囲気を出しながら銀髪の美少女？が入ってきた。

剣治は僕に笑いかけた後、手をメガホンみたいにして叫んだ。

「イクスさんはシンデレだー！」

ざわつとなる一部（数少ない男子である。）次の瞬間、剣治は水浸しになつた。啞然とする教室、だが僕は見た。イクスさんがチヨークを持って剣治に向けて口をぱくぱくさせたのを。隣の席の亜美さんもイクスさんを見ている。彼女も気がついたの

だらうか？

「つ、ツンデレですって？」

なんか違うとこりで驚いてる気がする。

剣治は服を乾かしにじーかに行つた。先生がイクスさんに自己紹介をさせる。

「私の名前はイクス・リベナ・マッカローーですーーみんなよろしくね？」

か、変わり過ぎている。そんな事を考えていると近くにいた男子が立ち上がり自分の顔に手をかけ剥がす。中からなんと剣治が登場。教室は一時騒然となる。

「猫被らないでほしいな。ツンデレ魔女！」

バツシャーン！

剣治がまた水浸しになり教室を出していく。

イクスさんはみんなにわらいかけ次の自己紹介に入つた。

「私はあんまり身体は強くありませんが頑張っていきたいと思います。みんなと会えたのも何かの縁です。よろしくお願ひしますね？」

パチパチと拍手が飛んだが・・・。

廊下側の窓が開き、剣治が顔を出す。

「嘘はその性格だけにして欲しいな！ツンツン魔女っ子。本当は・・・」

・

そこまでいつて剣治は洪水に流されて廊下からいなくなつた。後には静かになる教室が残された。

そしてイクスさんは最後に続けた。天使の微笑みという奴で……。

「・・・みんな！ よろしく！ テヘッ？」

教室の一部が泣いて喜んだのは間違いないだろう。その時、窓の外から紙ヒコーキが飛んで来てイクスさんの目の前に落ちた。

彼女がそれを拾いあげ広げた。何か書かれているようだ。窓の外には剣治が立っていたので書いたのは剣治で間違いないだろう。イクスさんの顔が固まつた。銀髪が怒りに燃えている。外は急に曇り出し、イクスさんは先生に告げた。

「少し緊張したからトイレにいってきますね？」

有無言わせずに教室を出るイクスさん。その後、剣治が何か青い液体状の生物から逃げたのを目撃したのは僕だけだと思う。帰ってきたイクスさんは少し残念そうな顔だった。つまり剣治に逃げられたみたいだ。

「さて、イクスさんの席はどこがいいかな？」

この教室は人数が少ないので所有者がいる机は少ない。（ほとんどの男子の隣には誰も座っていない。）祈るように田井を覗じる男子達。

「そうだ！ イクスさんは剣治と知り合いか？」

首を横に元気よく振るイクスさんはニヤリと笑った。

「いいえ、あんな方は知りません。私が知っているのは・・・。

そんなに僕を見ないで欲しい。

「なるほど。」

先生がそれに気付く。当然、教室のみんなも僕を見る。僕は教科書でそれを塞ごうと努力した。特に痛かったのは男子からの殺人光線である。（それから僕に話し掛ける男子はあまりいなかつた。）決定したかと思つたが、僕にはまだ切り札がいる。そう、僕の隣には亜美さんがいるのだ！

「あ、隣は空いてないな・・・。」

勝つた！だが甘かつた。あんパンにイチゴジャムつけるより甘かつた。

「・・・・じゃあ反対側に机をつけます。」

「そりゃ、じゃあそりよう。」

左から、窓、亜美さん、僕、僕たちは最後尾なので僕の隣には誰もいない。

敗北それは友に捧げるレクイエム。そんな事を考えていたらイスさんがやってきた。おまけで机がついてくる。そして僕の隣に座り、右手を差し出してきた。

「よろしく、時雨さん。」

「…………」

右手を掻もつとしたら亜美さんが叫ぶ。

「しーくん駄目だよー異だ！」

え！

なんとみんなが見ている前で僕にキスしようとしたのだ。しかし、亜美さんが言つてくれたので避ける事に成功。だが、男子は僕を睨んでいる。明日まで生き延びる事が出来るだろうか？

「うふふ、挨拶よ。」

「うんうん、時雨君挨拶だよ。」

剣治がいつの間にか机に座つてゐる。

まだまだこれから苦労は続きそうだ。

ちなみに紙ヒコーキにはこんな事が書かれていたらしい。

『ぶりつこ魔女ー参上ー』

意味が全くわからないのは僕だけだろうか？

やばいです。シンシン魔女が猫を被ると剣治はながされる？（後書き）

やばいです。非常にやばいです。まだ夏休みの宿・・・なんでもないです。さて、前作はめっちゃファンタジーになつてたんで起動修正してみました。意見をくれてありがとうございます。初心に帰る為に転校させようか迷いましたが、止めました。という事で代わりに誰か転校させてきました。どうだつたでしょうか？

そこに 時雨の休める場所は学校ではない。

彼女、イクス・リベナ・マッカローーさんがきてから1時間が過ぎた。教室のみんなは彼女を質問責めにしていて身動きが取れないみたいだ。僕はみんなの邪魔にならないように亜美さんと剣治と一緒に廊下で話をしている。廊下にはまだ魚がピチピチ跳ねていたり、海藻なんかが落ちている。先程剣治を流した時の魔法の忘れ物である。

「しかしまあ一時雨君も大変だね。」

自分には関係ないといつぶつに剣治は言つ。
「剣治がしーくんを魔界に送るからあんなのがくるのよ。」

剣治から事情を聞いた亜美さんは文句を言つ。

「まあ、大丈夫だよ。案外いい人だから。」

僕は出来れば魔界の話はしたくなかったが、剣治が話してしまつたので今は別によかった。

廊下に新たな人物がやってきた。

「時雨さん、探しました。」

イクスさんである。剣治はニヤリと笑いながら見ている。亜美さんは・・・何故か僕の前に出た。

「あらどなたかしら？」

当然だとばかりにイクスさんは亜美さんに尋ねる。

「私はしーくんの第一の友達と・・・席の隣人！そして断罪天使の

霜崎 亜美よ！」

剣治はかなり笑っている。しかし亜美さんは構わずに続ける。

「・・・あんたこそ何者よ？古代魔法が使えるらしきけどどんな魔女さんよ？魔女なんか宅急便やってればいいのよ！」

何となく一雨きそつた雰囲気である。今日の天気は快晴だったはずだ。

「古代魔法が使えるようになったのは・・・時雨さんのおかげよ。亜美さんが？という顔をする。イクスさんはまだ続けるようだ。僕が逃げようとしたら剣治に捕まつた。

「・・・逃げちゃ駄目だ！」

一言呟き僕を離した。そしてイクスさんは遂に喋ってしまった。

「私、彼と契約したの。勿論紙じゃなくてあっちでね。」

愕然となる僕。これ以後亜美さんは僕を無視するだらう。だが、亜美さんは僕の知らなかつた真実を話しだした。（剣治は知つていたらしい。）

「私だつて・・・しーくんと契約したもん！」

知らなかつた。僕したかな？イクスさんは僕に尋ねてきた。

「時雨さんそうなの？」

「う、うーん？ わからんないなあ。」

亜美さんが口を開く前に剣治が話しだした。

「時雨君が屋上で氣絶していた時に亜美は契約したのさ。だから時雨君はその事実を知らなかつた・・・・。なんなら証拠のビデオを見せようか？」

もし、将来僕が警察になつたら真っ先に剣治を盗撮の疑いで逮捕するだろつ。更に亜美さんは続ける。

「・・・それにしーくんが滅多にしないしない授業中の居眠りの時もしてゐるもん！」

剣治が今度は写真を取り出す。

「ちなみに証拠写真もあるよ。」

・・・捕まえた後は余罪も追求しておかないと云ひかな。

イクスさんも負けてはいな。

「ふうん、だけど私は意識があるときでしてゐるもんねえ！」

「」で授業が始まるチャイムがなり、一旦終了となつた。まあ、引き分けといつてこりかな？ だが決着をつけたいらしい。授業中、ふと亜美さんをみると段々こつちに近付いているのだ。そしてイクスさんにいたつては何かの粉をまぜている。（美奈さんに甘飲された事がある眠り薬みたいだった。）

ある意味嬉しいが実際は困るだけである。すでに亞美さんは僕に隙が出来たらするつもりだ。そしてイクスさんはハデスからもらつたジュースの中に入れようとしている。剣治に助けを求めるとな彼は真面目に勉強していた。頼れるのは自分だけ。僕は手を上げ先生にいった。

「先生！頭が痛いです！身の危険感じるから保健室にいっていいですか？」

「ああ、いいよ。」

もう一人手を挙げる人物がいた。剣治である。

「じゃあ生徒会長として彼の付き添いをします。」

更に一人手を挙げたがこれは却下された。

「「先生！私も天道時君の付き添いしていいですか？」

「一人で充分だろ？」

こうして僕は教室から出る事に成功したのであつたが、一つ忘れていた。途中で剣治は戻つて行つた。彼なりの優しさだろう。保健室の扉を開け、先生にベットに寝ていいか尋ねる。

「「自由に。だけどこれから僕は少し居なくなるから保健委員を連れてくるよ。」

先生がでていき静かになつてからベットにダイブ！だが、それは

間違った行為であった。ベットに乗った瞬間、白衣のシーツが僕を飲み込んだのだ。

「うふふ離れないわよ時雨君？」

「その声は・・・舞さん！」

忘れていた。彼女は保健委員であった。だが・・・。
「来るの早過ぎじゃないんですか？」

「テレポートしてきたの。うふふ。誰もいないからいろいろな事ができるわよ？」

シーツが取れて白衣の学ランを着た舞さんが現れる。

「いや、別にしなくていいよ。」

僕は跳ね起き、走って保健室を後にした。もう少しで教室である。なんと剣治が窓から飛び出してきた。僕に気付き手を振る。

「時雨君、危ないから逃げたほうがいいぞ！」

剣治はこっちに走ってきた。そして向こうからは濁流がこっちに向かって流れてくる。間違いなくイクスさんが唱えた魔法だ。僕も右をして走りだし、隣にいる剣治に聞いた。

「剣治、今度はなんていったの？」

「・・・普段はシンシンしてゐるくせに今は猫ちゃんか?と言つたら
「うなつた。」

後ろからは濁音が轟くが剣治は止まり、後ろを向いた。

「・・・流石時雨君と契約して手に入れた力だな。だが、怒りに

任せてるから無駄だな。」

多分、怒らせたのは剣治ですが？

『我は、天界、魔界を守護する孤高の罪人。』

剣治に紫の羽が生える。

「見ていたまえ！これが罪人天使の本氣だ！」彼の右腕には紅いハリセンがそして左腕には蒼いハリセンが出現する。

迫り来る濁流にハリセンをぶつける。

バシン！

濁流は消えた。あのハリセンでシッコミしたらボケは跡形もなく消えるに違いない。

「ま、さつとこんなものだよ。」

天使化を解いた剣治は呆然としている僕に話し掛ける。

教室に戻つてから少し経ち授業が終わつた。次は移動教室だからみんなが理科室に移動し始める。なかにはリムジンを呼びそれに乗つていく人もいたが僕は違つていた。ちなみに歩いていないし、羽を生やしているわけでもない。

空とぶほうきに乗つているのだ。

「時雨さんどうですか？私のほうきは？」

「ははっ、凄いですね！」

子どもみたいだが、楽しいんだからしかたないだろう。

「ぐーー！負けたのがくやしこよー・剣治、なんかだしてー。」

「おーおー、僕はドラ もんじゅないから無理だね。」

下では走りながら会話している畠美さんと剣治がいる。それから僕はイクスさんの後ろに座ってイクスさんをしつかり掴んでいる。
「時雨さん、もうちょっとしつかり掴んでないと落ちますよ？」

「あ、うんわかった。」

ちなみに僕はイクスさんの肩を掴んでいる。そして肩に力を込め
る。

「そういう意味ではなくて私にしがみついて下をこ…そういうこと
落ちますよー。」

仕方なくイクスさんの腰より上に腕を巻き付ける。

? 柔らかい。

「し、時雨さん。どう掴んでるんですか！」

・・・・・テヘッ。
「す、すこませんー！」

僕は千夏姉さんに意見する。

「ちよっと千夏姉さん何やつたらのー。」

「時雨がお約束をしないから私がやつてあげたの。大きめはまあま
あね。」

未だ掴んでいた手を離す。

「あ、時雨さん今離したらおちますよー。」

後の祭である。僕はほつきから落ちて床に・・・突撃せずに天使化した亜美さんにお姫様抱っこ状態でキャッチされた。何と無く恥ずかしいな。

「へへーん、貴女のお陰で時雨君を奪還できたわー！そのまま黙つておけばよかつたのにね？」

すぐ上には亜美さんの顔がありつい田をそらしてしまつ。

「うう。黙つて飛んでればよかつた。」

「あの、一人ともすでに理科室は後ろにあるけど？」
授業を告げるチャイムがなり、後で先生に怒られたのは変える事のできない真実であった。そして昼休み。亜美さんとイクスさんはどこかに消えた。亜美さんは大体昼休みはいないがイクスさんまで居なくなつたから教室のみんなは残念そうだった。

「・・・うーん？どこかで弁当食べていようつかな？」

教室をでると薔が教室の近くに立っていた。

「兄様！一緒に弁当食べよつ？」

学校で薔とお弁当食べるるのは初めてである。何故なら薔とはクラスが違うし、普段薔は亜美さん達と同じに姿を消す。

「うん、こいよ~じゃあ何処で食べる?」

薔は高い所が好きだから屋上かな?

「えっとね、じゃあ中庭!」

「あの薔ちゃんが甘えてる!かなり珍しいわね?誰、恋人?」

「知らないの?あれは薔のお兄さんよ。」

「え、だつて歳同じだよ。双子?」

「薔は養子だつてさ。」

「まあ、なんにせよ男子にきつこ薔ちゃんが甘えてるなんてそんなにいい男かしら?顔は少しカッコイイかな?身長も高いぐらいだし。性格は・・・優しそうね。」

「うん、彼は優し過ぎるわ!」の前なんかお婆さんが困ついたら一緒になつて困つて手伝つていただぐらいだから。

僕は薔の隣に座りお弁当をひろげるが・・・。

「あれ?」

中にはあまり入つてなかつた。

「兄様早弁したの?」

身に覚えが全くない。

「いいや? してないのに減ってるなんておかしいな。」

多分これだけでは足りないだろうな。午後は苦しみながら授業を受けるめにならんだろうな。そんなことを考へていたら田の前にお弁当が出てきた。

「・・・兄様、今日たまたまお弁当自分で作ったんだ! でも美奈さんが作ったのを私食べるから兄様にあげるね?」

なんて優しい妹なんだろう。まるで仕組んでやつたとしか思えない。

「うん! ありがとう薔。

」いつも妹が作ったお弁当はまずいらしいが薔は料理がじょうずであった。

「おいしいなあ。やっぱ薔は料理が僕よつまいなー。」

僕は感動しながらお弁当を食べている。

一方、屋上では戦いが繰り広げられていた。

「亞美さん、私と戦つたつて敗北しか残りませんよ?」

魔女姿のイクスは白い羽の亞美に告げる。

「やつくりそのまま返してあげます!」

まあ、普段は薔や焰がいるのだが、今回は一人の決闘を審判する焰しかいない。薔は用事があると言つて居なくなつた。

僕はお弁当を食べ終わり、のんびりしていた。雲が通るのをゆっくり眺めるのもたまにはいいものだ。

「……兄様、今朝の約束覚えてる?」

「うん、水族館だよね?」

久しぶりに水族館に行くのは楽しみである。薔と話していると上のほうからなにやらふつってきた。

「雨?」

しかしそれもすぐになくなりまた辺りは太陽が照らす。お弁当を食べてから少し薔と話をした後、僕は教室に戻った。教室にはあまり人がおらず、僕の隣人さん達は机に突つ伏していた。しかも一人とも濡れていっているのだ。

「どうしたの!」

「いや、暑かつたから私がイクスさんに雨をたのんだんだよ。」

「うん、そうです。」

しかし濡れたままでは風邪をひくので僕は彼女達を保健室に連れていき、別の服に着替えてもらつた。

保健室の前で待っていた僕は何故か想像していた。
やっぱり体操着かな?それとも・・・。

「」の学校の女子の制服は変わっており、上は男子の学ラン下はスカートである。そして学ランの色は自由である。(僕の学ランは色

々ありボロボロになつてるので今は転校する前着ていた黒い学ランである。）亜美さんは緑色の学ランを着ていて、イクスさんは青い学ランを先程まで着ていた。

そして保健室からでてきた二人は体操着ではなく白い学ランを着ていた。

「・・・白い学ランなんて初めてだから恥ずかしいな。」

「うーん、白いのは少し落ち着かないですね。」

似合つてゐるなあ。

二人と一緒に教室に戻る。ちょうど昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響く。それから放課後までいたつて平和であつた。なぜなら一人とも疲れたのか眠つてしまつたからである。放課後は理科室の掃除が待つている。

その二 時雨の休める場所は学校ではない。（後書き）

なんか最近色々大変です。さて、今回は前回の続きをみたいになりましたがいかがでしょうか？まあ楽しんでくれたら書いてる僕も嬉しいです。未だ文章力がまだまだですが出来ればこれからもよろしくお願いしますなり。次は理科の先生から罰として理科室の掃除をもらつた三人の努力を書きたいと思います！

そのせん 理科室、それは悲劇の宝箱。

さて、放課後。僕たちはほつきをもつて理科室を掃除している。ちなみにイクスさんは愛用のほつきである。一人は理科室をして僕は理科室の掃除をしているのだが、かなり汚い。棚の中には無造作に色々な薬？や液体が入っていてぐちゃぐちゃになっている。「……なかなかこの引き出し開かないあ。えいつ。」

その衝撃で上から液体の入ったびんが落ちてくる。僕は人体模型に阻まれて避けることは出来なかつた。バシャーン。

液体が僕の頭から身体を濡らす。

最後に空の瓶が頭にあたり僕は気を失つたのだ。

目を開けると誰かにひざ枕されていた。

「・・・うーん？」

「あ、気が付いた？」

「よかつたあ。」

立つてみると亞美さんとイクスさんが僕を見下ろしている。・・・なぜだ？彼女達はこんなに背が高くないぞ？

「あのー。僕の名前は何かな？もしかして時雨とか？」

亜美さんが言つてゐる事がよくわからないな。

「うん、僕は時雨だよ。」

イクスさんに抱き上げられてから自分がどうなったかわかった。
「か、身体が縮んでるー。」

まるでコナ である。

イクスさんは僕の顔にほお擦りしながら亜美さんに話しかける。

「かわいいー。時雨さんが小さくなっちゃったー。」

やばい状況には間違いない。でかこの人は何をやつてゐるだ。

「あ、亜美さん！」

助けてくださいー！

「やめてあげなよ。しーくんが可哀相よ。」

伝わった！ うれしいなうれしいなあ！

「私にも抱かせてよ。」

意味がねえー。かなしいなかなしいな。

僕は一人の玩具にされ、色々な事を言われた。

「あの、亜美さん？」

「しーくん亜美お姉ちゃんと呼ばないと駄目よ。わかつた？」

「じゃあ私はイクスおねえたんね？」

おねえたん？何だそりゃ？

「ほりほりじつてしーくん！」

やけくそだあ！

「わかりました！亜美お姉ちゃん！」「…
恥ずかしい！だが、まだ残つてゐる…

「早くしーくん！私にも言ひてね？」

「わかつてます！イクスおねえたん！」

うん、じつのはうが恥ずかしいな。

「時雨君も小さくなつたら可愛いものだな。」

「誰だ！誰だ！だれだあー！廊下の近くに光る影へ赤いがーくらん
の剣治だー。」

「さて、一人はまだ掃除が終わつてないだろ？君達は早く掃除を
しないと怒られるよ。わかつたかな？」

「ぐ、わかつてるよー！」

二人は最後に僕を抱きしめて理科室に戻つていった。

「剣治、助かったよありがとつ。」「

ありがたいな剣治は普段の僕と変わらずに接してくれ・・・

「ふ、剣治兄様と呼びなさい。」

なかつたか。

「冗談だ。君は今ひまかね？ひまならついてきてほしい所があるんだが・・・・・どうかな？」

返答に困つていると剣治はある条件を出してきた。

「元に戻りたくないなら別にいいんだよ？今から行く所はもしかしたら君の悩みを解決してくれるかも知れないな。」

「わかつた！行くよ！行かせてもらいます！」

満足そうな剣治を見上げるのは少々憂鬱だったのは誰にも言わないだろ？

そして僕が案内されたのは冥土喫茶である。

「実はここはメイド長はそういう訳分かんない事を意外に知っているんだ。僕も昔は頼つたもんだよ。・・・・て、中にはいろいろか？」

今日は普通に鍵があき、中にはメイドさんがやはり沢山いた。そして剣治を見てさつさと先闇体制に移行。殺伐とした店内に流れる不釣り合いなのんびりした音楽が戦いのBGMになるかもしれない。だが今日、剣治は戦うつもりはないようだ。

「今日僕は遊びにきたんじゃないんだよ。ごめんな？」

「嘘言わないで下さい！」

当然、剣治を信用するメイドさんはない。中には更に警戒を強めるメイドさんもいる。

「やれやれ、そんなんに遊びたいな！」の時雨君//バージョンと遊んでくれ。はいプレゼント。」

体重の軽くなった僕を掴み近くのメイドさんに放り投げた。

「うわーー！」

「きゃああー！」

メイドさんに上手く抱きしめられたので怪我はなかった。

「剣治、投げないでよー。メイドさんに迷惑がかかっただらつ。」

「さて、ね?どうかな?」

そういって剣治は僕を置き去りにして奥の部屋に入ってしまった！僕も慌てて追い掛けようとしたがそこは問屋があろうとなかった。「受け止めてくれてありがとう」「やれこめす。」

メイドさんから離れようとしたら、離れることができない。メイドさんを見ると僕をはなやうとしていた。

「僕、名前は？」

「天道時 時雨ですよ。たまにここにきましたよ?忘れましたか?」

僕は今の状態を忘れていたのである。
何故かメイドさんは僕を抱きしめた。

「時雨様が小さくなつたらかわいいなーほらお姉さんて呼んでみて
くれないかなあ？」

只今僕はそれどころではありませんー柔らかななかで窒息死しそうですが・・・。

そして辺りのメイドさんが騒ぎだす。ギャー、ギャー騒いでいるのだ。しかしそれはすぐにおさまった。何故なら・・・。

「均等に触りましょうー! まず時雨君をみんなの中心に設置して!」

ここでも玩具扱いである。

[写真をとられたり抱きしめられたり色々されたり大変だった。そして最後のほうつまり新人メイドさん達の所になつた。まず一人目のメイドさんは知り合いであった。]

「時雨様、お久しぶりです。」

「零ちゃんー元気だつた?」

「うーん、大きいな。・・・。あれも変わらずでかいが身長も今の僕より大きいな。そして零ちゃんはやつと普通の質問をしてくれた。

「なんでそんな小さくなつたのですか?」

僕はついでに全員に事情を説明、納得してもらつた。(中には剣治があもしろ半分で僕を小さくしたと思つている人が何人かいた。)

「大変ですねえ?」

「うん、大変なんだよ。」

一人で話していると後ろからメイドさんが姿を現した。そこで零ちゃんとの話は終わりまたいろんな事をした。

最後のメイドさんが終わり、ちょうど剣治が出て来たので今日は帰る事にした。

「またきてくださいね？小さな時雨君。今度はぎゅっと抱きしめてあげるからね？」

いやいや、気持ちだけで結構です。今日知りました。人間を殺す事が得意なのはあれがでかい人ということを。

剣治の話によると少しの間はこのままでいいといけないそうだ。
・・・・・疲れると思うのは僕だけかな？

剣治と別れ、走っていえに帰る途中誰かにぶつかった。

「すいません！大丈夫ですか？」

「あたたた。大丈夫よ？僕こそ怪我ないかな？」

あれつ？どこかで見た顔だな？しかし・・・。

「あ、しなか。やっぱり大きくなつたのかー…
しなはキヨトンとして僕を眺めている。

「僕だよ、時雨だ。」

「・・・え。嘘！大きくなりすぎたかな？やっぱリマリのキノコ
では駄目だったかな？」

しな に事情を説明。ふうんと頷き僕を抱き上げた。

「こんなに可愛くなつちゃつてたあ。・・・・・誘拐しちゃひおつかな
?」

「おいおい、前科があるから罪は重いぞ?」

笑う しな は僕を家まで送ってくれた。

「じゃあ明日学校でね?」

「うん、また明日ね?」

しな は走つて帰り僕だけが残されたが・・・・。

「・・・・・ありえないな。転校生が一日連續でくるなんて・・・・

うーん、明日も大変な一日になりそうだな。

「ただいま。」

「おかげりなさい時雨様。」

そして美奈さんは仰天。

「し、時雨様がミニになつてるー!」

執事さんも仰天。

「時雨様がチビなつてるー!」

僕たちの視線に気付き咳をする執事さん。

「・・・・・コホン、事情は剣治様から聞いてます。」

そういうて引っ込む執事さん。よほどはずかしかったのだろうな

あ。僕が考えていると美奈さんに抱えられた。

「うーん、めっちゃかわいいですね。食べたいぐらいですねー。そつだー今日は時雨様のフライにしましょつか！」

非常に残酷である。一瞬だけ想像しようとしたが僕の脳内細胞がモザイクをかけたので時雨のフライはよくわからなかつた。

「冗談ですよ。冗談！」

貴女の顔は笑つてますが目が獲物を捕えた獣みたいになつてしまふ？

「・・・やつぱり生ですかね？」

「はい？」

かぱつ。

耳たぶを美奈さんにあまがみされた。

「ちょっとなにやつてんですかー！」

だが、美奈さんは止まらない。抵抗しようと腕を動かそうとしたらその腕を掴まれた。

「小さいから力があまりないですねー。」

そしておひしてくれた。

「うふふ、悪戯っ子なメイドを許して下さい、御主人様。」

「あはは。いいよ別に。」

今更玩具にされても別にいいや。だが、さつきの美奈さんは恐かつたな。

「ねえ、美奈さんシャドさんはどうしたの？」

「貴方の影は『黄金の林檎』を探しに旅に出ましたよ？なんでも時雨様にプレゼントするだとか・・・」

今、守って欲しいなあ。そんな時扉が開き薔薇が帰つて来た。

「ただいまー！」

「あ、お帰りなさい薔薇様。ご機嫌ですけど何があつたんですか？」

「えへへ～。実は・・・・・・」

僕を見て固まつたがすぐに解凍。

「兄様？」

「うふ、そうだよ？どうしたの？」

「兄様がどうしたの？小さくなつてしまつて・・・」

本日何回目になるだろ？・・・・僕は事情を説明したのであつた。

「大変だねえ！じゃあ私が兄様の世話をあげるね？」

「大丈夫だつて！自分の世話を自分でできるよ？」

今日の薔薇は折れなかつた。

「ううん！普段私に優しくしてあげてるから今日は私が手伝ってあげる！」

仕方ないなあ。

「わかった！僕の世話を任せせるよ。」

間違いそれは後で気付くものである。僕は明日になつてそれに気が付いた。

やれやれ 理科室、それは悲劇の宝箱。（後書き）

やれやれ、時雨君が小さくなりましたね。小さくなつたらみんなからなめられますねー。そして、これから小さくなつた時雨君のいじられ生活が始まります。

そのよん 小さくなつたらやめり恐怖！

小さくなつた僕は只今勉強をしています。身体は子ども。頭脳はちゃんとした高校生です。

カリカリカリカリ。

「・・・わかんなないなあ。薔に聞いてこよつ。」

今の自分には高い椅子から降りて歩きだす。薔とは学年が同じだからこいついう場合はかなりうれしいですな。

だが、部屋には薔はいなかつた。

「あれ？ 薔がいないなあ。トイレかな？」

薔のフカフカベットに腰掛ける。そして床に一冊の本が転がっている。どうやら文庫本のようである。

題名は・・・。

『義兄の口説き方 第一。』

とても変わつた題名の本である。内容は・・・。

『「今日、義兄ちゃんのお弁当を掠め取り、少し中身を食べました。そしてちやつかり私の作ったお弁当をあげました。」

『うーん、大胆だなあ。てか、普通ばれるだろ？ ばれなかつたのかな？

『「義兄ちゃんは全く気が付かずに私の作ったお弁当をおこしいと
言つてくれました。」

』

ばれてないみたいだなあ。この義兄さん、ぬけすぎじゃないかな
?ほんとにこんな人いるのか?いたらあつてみたいな。

「あ、兄様。珍しいね?私の部屋にくるなんてさ。」

薔が部屋に入ってきた。そして僕が持っている本に手をとめる。

「に、兄様!その本読んでたの?」

「う、うん!読んでたけど悪かったかな?」

無言で僕の近くに立ち、本を取り上げた。

「」、子どもが見るもんじゃありません!」

「僕は子どもじゃないよ!」

もう少しで十六だ!

「わかつてるよ!」

薔が涙ぐむ。僕は慌ててあやまつた。元は僕が勝手に読んだのが
悪かったから仕方ない事であり、薔が泣いてる姿はあまりみたくない
い。

「じめん!僕が悪かつたよ!」

薔の涙が消え、笑顔になった。

「もういいよ。私が床に置いとくのが悪かつたから……。ところで兄様何かようかな？」

ああ、物語に夢中で忘れていた。

「実はこここの問題がわかんないんだ。薔、わかるかな？」

「ああ、ここはこうしてね？それから……」

薔先生の講義により理解を得た僕は我が陣地（自分の部屋）に戻り、夕食まで勉強を続けた。

そして夕食。

「ほら兄様口開けてよ！」

薔は僕の前に陣取り、僕に食事を食べさせてくる。

「ううー、わかったよおーあーん！」

箸で摘んだエビフライが口に入らずに僕の鼻に当たる。

「うーん、やつぱり大きかったかな？……これでいいかな？じやあ兄様あーん！」

「……あーん。」

「」のような恥ずかしい光景は夕食が終わるまで続けられたのだが

た。だが、大変なのはこの後である。

夕食を食べ終わり、お風呂に入る事にした僕は着替えを持ち浴室に直行しようとしたら薔に抱き上げられ無抵抗で非力な子どもとなつた。

「・・・兄様は私がお風呂にいれてあげるよ。」

有り難いが迷惑きわまりない行為かもしれない。

「大丈夫だつて!」

だが、僕はそのまま薔にラグビー・ボールみたいに抱えられ浴室といふ名のゴールにタッチダウン!

「さあ、兄様服を脱ぎましょー!」

「わーー!やめてよー自分で出来るから!」

めいいつぱい抵抗したが無駄にカロリーを消費しただけであつた。今の僕はまるで裸の王様、股間を両手で押さえている状況である。そして・・・。

「つ、薔ー何やつてるのー!」

「兄様こそ何言つてるの?お風呂は服を脱いで入るものだよ。」

た、確かにそうだが・・・。そうだ!昔使つたあれを使おう!・

「それに一人はきついよー!」

「今の兄様なら充分入れますよ。」

「うぐ、しまったそ、うだつた！僕は薔がわつたと服を脱がせ出したのでお風呂の中に逃げ込んだのだった。

『兄様、何やつてるの？昔はよく入つていたじゃない。』

『昔は昔。今は今。人間割り切りといつものが必要である。

「だ、だつてさあ！」

有無言わせずに僕を引き寄せ抱きしめる。

「うーん、私が抱きしめるぐらい小さくなるなんて兄様かわいい。それにブヨブヨ柔らかいしなあ～。」

「ちよつと薔、当たつてー。」

だが、薔は自分の世界に旅だつてしまつた。
「うふふ～。兄様～、今から甘えるねえ～」

おいおい、今の僕が薔に甘えられたら次のよつた事になるだろ？

『ぐふあー・マスター、甘えるねえ？』

『あはは、アーラゴン、君に甘えられたら僕はペッシャンこだよ・・・・・』

『マスターー。』

『ああああああああー。』

・・・・救急車をよぶなり何番だったかな?

「兄様～。」

僕の番がきたようだ。思えばここは土地では色々な事があつたなあ・・・・。

ムギュ―――。

「あー―――（すでに諦めモード）」

つ、薔のあのが当たつてゐつて！

『た、隊長！大変です！鼻から燃料が漏れる危険が出てます！』

『何い？急いで脳内細胞に冷却装置を送つこの状態を食い止めるんだ！』

『了解！これより冷却装置を送ります！』

プシュー。

『隊長、なんとか止まつました！』

『そつか御苦労だったな。だが、油断はできないぞ？』

「あ、危ない危ない。」

僕は自我を保ち、薔をこの世界に連れ戻した。

「おい、薔。体洗わないといけないよー。」

はつとした薔は立ち上がる。

「ううー。」

何もつけてない！

『た、隊長！またやばいですよー！このままで燃料だけでなく意識が閉店する可能性が出でますー。』

『くっ、脳内には先程通り冷却装置を送れ！意識には気合いを送つて阻止するんだ！』

僕は自分の頬にパンパンと気合いをいた。

「そ、兄様も身体洗つてあげるからこっちきてよ。」

・・・・・薔、今君がしているのは間違いなく自分から僕を引き寄せないかな？

結局、僕は薔に身体を洗われるみた이다。

「さあ、兄様身体を綺麗にしようね？」

「アハハ、いいよー！僕ひとりでできるもんっ！」

「うふふ。甘いわよ兄様。そーら、いうこと聞かない悪い子を捕まえちゃった！」

「うわああああー！」

・・・・・その後、僕の身体は隅々まで綺麗にされた。そりやもう隅々とね・・・・。身体を洗つた後、さつさと出ようとしたら、や

はり薔に捕まつてしまいオダブツなり・・・。

「ああ、田まで数えよつね?」

「はいはい、 $5 \times 5 = 25$ 。 $10 \times 10 = 100$ 薔先生、数え終わりましたよ。」

「早っそんでもつて意味分かんない数え方してない?」

「薔先生、近頃の子どもはみんなこうしてます!だからお風呂からあがつていいですか?」

流石の薔も頷くしかあるめえ。

「うーん、しょうがないなあ。分かった、あがつていよい。」

ふ、今日は僕の勝ちだな。今日は早くベットに入り寝よつ! 薔があがつてくれるまえに!

薔より早く着替えた僕は自室のベットにダイブ! 出来なかつた。何故なら大量のトラップ? みたいなものがベットの上に置いてあるのだ。

「・・・なんだこれ?」

考えていると誰かに抱き上げられた。

「これじゃあ、流石の兄様も安眠出来ないから私のベットで寝よつ?」

「いやつ、別にいいよ。執事さんと一緒に寝るからさー。」
薔は悲しそうな顔になり、泣きそうな顔になつてしまつた。

「冗談だよー。わかったからね？泣かないでさあ。」

「な、泣いてないもん！田に虫がはいつただけだもんっだ！」

やれやれ。

言葉とは裏腹に僕をさりげなく、薔の部屋に監禁。僕はベットに薔と一緒にダイブ！

「えへへ～。抱っこしてあげる～！」

あははー。遠慮しますよー。だけビ声を出して言えない僕がここにいる。

「今日は私に甘えていいよ？兄様？だってこんなに小さいんだもん！兄様さえよければお姉さんと呼んでもいいよ？」

いや、それは学校でやつたしな。

渋る僕を見かねてか薔は何か言い出した。

「・・・くすん、私には甘えられないの？兄様。シャルさんは甘えてるくせに～。」

多分チクつたのは剣治だ。しかしこれで退路は絶たれた。覚悟を決めよー！

「・・・今日一日だけだよ薔。・・・わかったよ、薔お姉ちゃん。淋しがりやな僕をおもいつきり抱きしめてくださいー。」

明日、目が覚めたら大きくなつたらいいなあ。牛乳沢山飲んだら

大きくなるかもしれないな。

そして薔は僕を（非力）おもいつきつ抱きしめた。
ぐはあ！

「やつぱり兄様は優しいから大好きつ！」

ぱきぱきぱきぱき！

「あはは。がはあ！くつ、薔、もうちょい抱きしめる力を・・・。

「緩めてくれないかな？

「わかつたよ兄様、もっと強くだね？」

・・・・・！？

「ちがつ！あがつ！ぐはああ！・・・・・あべしつ！」

僕を助けてくれる人は至急、ここ連絡下さい。

どうやら氣を失てたみたいだ。薔は僕を抱きしめて寝ている。身体はしつかりホールド多分身体には生々しい傷がくつきり残っているだろうな。

「うーん、兄様あ？私がハグハグしてあげるよお？」

・・・・トラウマ、それは心的外傷。

3

2

1

ムギュウー！ ぐばつはあ！

・・・・次に起きる時は身体が大きくなつたらいいなあ。

やのよこ 小ねくなつたりせりつ恐怖ー（後輩や）

董恐いですね。さて、まず謝りまわ「めんなさい今回短すぎだつたと思います。本日は董の話になりました。どうだつたでしょうか？たのしかつたらよかったです。まあ、これからも応援よろしくお願いしたいと思ってます。

その「」何と無く新しい読み方。

朝、気分は最低。そして身体はボロボロだが、心はドクンドクン。
何故なら・・・・。

「・・・・なんか薔かなり格好がすごいよ。」

薔はかなり体制が危うい。もつ少し動いたら下着が見えそうである。朝からドキドキしつばなしである。

「薔、早く起きて起きないと僕が鼻血出してまた寝ちゃうよー。」

「う、うーん。わかったよ兄様。起きればいいんでしょ？」

眠たいと顔が訴えているがこれでいいのだ！

「兄様、おはよう・・・・まだ小さいままだね？」
はあ、まだまだ小さこまんまこれからどうなるんだり？

「まあ、誰かに頼んで大きくしてもらつよ。多分剣治が僕を戻してくれると思つ。」

結局、人任せだが、仕方ない事である。

それからいつものように朝食を食べて学校に向かうはずだったが・
・・・。

「時雨様、そんな格好では高校に入れませんよ？」
つまり身体が小さいので常識のある人は誰も僕とは分かつてくれないだろう。

「今日は風邪でおやすみと申しますので家に居てください。」

薔はすでに行つております、執事さんは用事で出掛けてしまつた。ちなみに母さんは未だに帰つて来てない。

「でも美奈さん。」

「お仕事聞かない悪い子にはお仕置きですよ~。」

曰がマジだ。

「わかつたよ。僕は一田家にいます!」
しかし、家に居てもひまなので美奈さんの手伝いをすることにして自分の部屋を片付ける事にした。

「・・・よかつたあ。まだこの本はばれてないようだ!・あ、こっちも大丈夫だ!」

自分で掃除をするとあの宝が美奈さんや他の人にばれてないかついつい気になつてしまつ。そしてついに読み始めてしまつ。

「・・・オーッスゲー!」

はつー殺氣!?

「・・・小さいのにやつぱりスケベですね?学校サボつてまでそのよつな本見てるなんて・・・」

僕の後ろには美奈さんが立つている。僕に残された道は一つ。一つ。つはじまかす。そして二つ田は白状する。

「『みんなさいー今すぐ』こんなかがわしい本は捨てますー。」

それから僕は美奈さんに持っていた本を取られた。しかし、残された本はなんとかごまかして守る事ができた。

「これは私が責任持つて処理します！」

「はい、すいません。一度とばれないよって隠します。」

「……なんかおかしい部分があつたけど今回せっこれで許しますよ。」

やつた！僕はやつたよ父さん！

「……反省しないみたいだからおつかいしてもうりますー。」

おーまこーじーとー

そして僕はメモをもらつて右腕に買い物力^{アビリティ}を装備して街とつ名のダンジョンに出かけたのであつた。

「……あ、今日はメイド物を読んでたみたいですね。うふふ、

今日は見逃してあげますよ、時雨様！」

大体のお使いを終え、最後の店に入る。すると後ろから誰かに声をかけられた。

「おや？時雨じゃないかな？」

振り返るとミースカートから伸びた足が見えたから見上げてみるとパンツが見えたので慌てて顔が見える所まで後退り再度見上げる。

「シャル姉さん…おつかい？」

昔は裁判長であり、今は僕を監視している立場である。

「そりだよ、しかし見ない間に縮んだね？誰かに頭叩かれたとか？」

僕は事情を簡単に説明した。

「大変だね？まあ頑張つてね。私が手伝つてあげれる事があつたらなんでもするからね？」

そういうて店の中から出てくる一人の客に話し掛ける。どうやらシャル姉さんは万引きGメンという仕事をしているみたいだ。邪魔をしてはいけないのでさっさと使いを済ませ家に帰ることにした。帰り道では誰にも会わず、ユーフォーを見たぐらいだった。

「平和だなあ。」

ほーほけいきょつ！

・・・・季節はずれの鳥までなっている。

自宅に戻るとすでに昼食の準備が終わつており、僕は美奈さんと一緒に話しかしながら御飯を食べることにした。

「・・・時雨様、昨日のお風呂は気持ちよかったです？そしてよく眠れましたか？（皮肉）」「

「うーん、やばかった！かなりやばかったかな？色んな意味で・・・（皮肉には全くこれっぽっちも気がついてない。）」

美奈さん。はあ、と溜息をつき、僕をまじまじと眺め決心したよ
うに呟つた。

「……今日、夜は必ず私の部屋にきてくださいね？」

前にもこんな事があつたよ。うなづく。

「……うん、頑張つていいくよ。今度はどんな薬かな？期待して
るよ。（かなりの皮肉）」

「ふふっ、任せてくれださい。時雨様の期待に答えられるよう努力し
ます！（皮肉といたえているがある意味違うので笑う）」

ま、期待していよ。・・・・いや、覚悟しておこう。

昼から今度は母さんの部屋の掃除。今は使われていないが、たま
には掃除しないといけないらしい。

棚を整理していると巻物？みたいなものが落ちてきた。

「……えーっと、これは家系図みたいだな。母さんの名前が載っ
てるし、蕾の名前も載つ・・・！」

「い、許婚！？」

「どういう事だ？ 蕾は妹だろ？」

しかも誰の許婚だ？・・・・・僕の許婚か？

しかし、バツテングが蕾の名前にはつけられており、びつやけり違つ
たみたいだ。

勘違いか、まあ、しあうがないな。さて、次を片付けようかな？

棚のうえからまだまだ色々な巻物が落ちてきた。特に気を引い

たのは次の巻物である。

『天道時家の本職』

一体全体なんて書かれているんだろ？

ペラッ！

『天界と魔界の霸王』

こらまたスゲー職業だな。勇者に倒される側だな。うん、ラスボスか・・・・・。

しかし、そういう意味ではないようだ。

『全ての人間以外の生命体をまとめし者。』

つまり、みんなをまとめる職業だな。うん。
僕は巻物を綺麗にまとめ、元の位置に全て戻した。見ようと思えばいつでも見ることが出来るからである。

「時雨様～！おやつですよ～。」

「は～い～！」

僕には巻物より大切なものは沢山ある～！まず、おやつ～！

冗談です。

「今日は時雨様の大好きなホットケーキですよ～？」

「わーい～！」

そこ、まるでガキだなんて思わないで下さい。僕はホットケーキが大好きなんですよ。

さつさと食べ終わり、そろそろ学校が終わる時間になる。部活をしてない人達は帰宅の準備をしていることだろう。

「やあ、みんなの代表でお見舞いにきたよ時雨君。ちなみに見舞い品はこの本だ。」

僕の部屋にある窓からなんなく入って来た！ルパン 世もびっくりだ。剣治に渡された本は様々な事が書かれていた。

「ありがとう剣治。僕はまだこのままかな？」

剣治は床に落ちていた手紙を僕に渡して言った。

「大丈夫、明日の朝には戻っているからね？そしたら魔王さんからの手紙を必ずだよ？わかったね。」

用事は無くなつたとばかりに今度は煙を出しながら消える。まるで忍者である。

「窓から帰っちゃった・・・・。はー」

床に一枚の紙が刺さつていた。

『時雨君、君の宝はこの剣治が確かに頂戴しました！』

おのれ剣治め・・・。

僕はどうにかしたかったが、どうすることもできないだろうなあ。

そして晩御飯。今日は執事さんもいるのでみんなで食卓を囲む。
執事さんは急に僕の顔を眺め始めた。

「……つーん、時雨様には何か良くない事が起きそうですね。気をつけとくだわー。」

すでに起きてますし、今日の夜起きやうです。

食後、薔は眠たそりしながら部屋を出ていった。

「疲れがたまつてるんでしよう。昨日の夜は色々な事があつたでしょうじ・・・・・。」

薔はそのまま寝つてしまつたようだ。ぐつすり寝ているから朝まで何があつても起きないだらつ。

今日ははゆっくつお風呂に入らつ、薔が寝ている間に・・・・・。

そして、約束通り僕は美奈さんの部屋に行つた。

「お待ちしてました。こちらに寝てください。」

そこに置いていたベットには不思議な装置がくつついている。まるで手術する機械みたいだ。

「・・・・あの、これで何かするんですか？もしかして・・・・・」

美奈さんは一ヶ口笑い。

「大丈夫ですよー。でも、早く寝てください。薔さんに邪魔をされないよつこわざわざ危険をおかして眠り薬をいれたんですから・・・・・」

「

は、犯人は美奈さんだったのか・・・。

「終わつたら何でもしてあげますよ。」

「てか、これは何する奴ですか？」

「貴方を元に戻す機械ですよ。嫌なら別にいいです。」

今すぐ戻れるなら・・・・。

「・・・わかりました。」

僕はベットに横になり、目をつぶつた。

「さて、始めましょうか？・・・改造手術を・・・。」

改造手術！

ウイーン！ガタン。

ぎこちやややややあ！

そして僕はなんとか身体が元に戻つたが、久々なので足元がふらつぐ。

「・・・やつと元に戻りましたね？うふふ、最後に薬をあげましょう時雨様！」

薬？自白剤かな、眠り薬かな？

「元に戻った記念ですよ。」

美奈さんの顔が近付いてきて・・・僕の顔にふれた。

少し僕は固まつた。美奈さんはそそくさとはなれた。

「私からの薬です、これで普段通りになりましたか?」

足がガクガク震え、床に尻餅ついてしまつた。

「・・・すいません、薬が強すぎました? では次にあの手紙を読んでくださいね? 剣治さんが言つていたとおもいますから・・・」

僕は美奈さんにあんぶされ自分の部屋に帰還。そこには薔がイビキをかきながらぐっすり寝ている。眠り薬は絶大な効果をうんだようだ!

ベットに腰掛け、美奈さんから手紙を取つてもらい黙読。

『久しづりだね、悪いが簡潔に説明しよう。時雨君にまた頼みたい事があるんだ、実は人間界に厄介な魔族がはいつてしまつたからそれを破壊してほしい。・・・』

そこに書いている魔族の名前は初めて聞くものであつた。

『天使を狩者 殺人機』
ジョンサイド・エンジール

ぶつちやけ、これはやばいんじゃない?特に名前が・・・殺人機とかいてもこう読む奴はまずいないだろ?に・・・。

明日も大変な一日になりそうである！

その1) 何と無く新しい読み方。（後書き）

皆さんこんばんは。いや～今年の夏は苦しました！特に夏休みの宿だ・い。さて、そんなことより今回はやっと魔王からの手紙をだす事が出来ました。次は暴れまくる奴らを出したいと思います！そして最後にいつも見てくれる方、ありがとうございます！

やのやく 旅立ちは漢と共に・・・。(前編)

えーっとやつと離しがかわりを迎えた始めました。

そのへく 旅立ちは漢と共に・・・。

手紙を見てから少し経つたある晴れた日の事である。その日は剣治と久しぶりに帰っていると公園に不思議な人がいた。

「・・・時雨君、殺人機だ！」

あれからずっと捜してようやく見つけた殺人機はとっても可愛いものであった。

放課後になつてすぐ、剣治が殺人機とはなにかと教えてくれた。

「人形の一種さ、昔天使をハリセンやバットなどで倒していた恐ろしい奴だ。今はほとんど壊されているのでその存在は疑問視されたりしているんだよ。」

たかだかハリセンなどで天使を倒すなんて・・・・・。

「大体、殺人機は女性型が多いらしい。なぜかは創る人達がほとんど男性だからだ！殺人機を見れば製作者の好みがわかるのだよ！」
うわースゲー。

「昔の資料を参考にして僕が創った殺人機を魔界にあげたんだよ。」

なるほど、剣治のタイプはそれを見ればわかるのか・・・・男型だつたらどうしよう。

そんなことになつたら僕は剣治を・・・・たおしてみせる！

「・・・何考てるか顔にかけてあるぞ。失礼だな時雨君、僕が創つたのはれっきとした女の子だ！昔時雨君が倒した龍と色々まぜたものだ。」

知らなかつた。そういうえば、初めての魔界はいい意味と悪い意味で色々あつたなあ。

「じゃあこれから殺人機を捜そつか？」

そして今にあたる。

「彼女が『なんでやねん！』と言つたらハリセンが振り落とされる合図だ。」「

『なんでやねん！』

どがしゃ。

「うわーーあれハリセンじゃないよーーちなみにあの人関西の人？」

「いや、違うよ。あの機能はただたんに面白いからつけただけ。あ、名前はまだつけてないからね。」

僕の後ろからそんな声が聞こえる。

『秘奥義 慕氣斗津呼身！－（ヒオーギ ボケトツシムツ）』

「ま、待つた！話しあいをしよう！」

僕はこっちにやつてこようとした殺人機さんに話しかける。

「貴方が何故そのような判断をしたか教えて欲しい。私が納得出来なかつたら攻撃を再開する。」

理由は簡潔だ。

「貴女は周りを見て気が付かないんですか？」

殺人機さんは辺りを見て気が付いた。

「まーくん、あれって痴話ゲンカかな?」

「いや、多分どっちがツッコミがすごいからケンカしているんだよ。」

「僕たちは小さな子どもに囲まれいた。剣治はすでにどこかに消えていた。」

「貴女は、こんな小さな子ども達を巻き込めるんですか?」

辺りが歎声をあげる。

「こーちゃんいい事いづねえ?」

「惚れそうだぜ!」

・・・・・本当に子どもかな?

「・・・わかつた、では何処で話し合ひを行つ?」

野次馬のませた子ども達はそいつた瞬間、全員が公園からでて

いつた。そして最後に出でていく少年がこいつだった。

「・・・今日は僕たちの心の休まる空間を貴方達に提供してあげますよ。」

何と無くキザだ。

それから僕たちはブランコにすわり話始めた。

「僕の名前は時雨。君は・・・。」

そんな時誰からメールが来た。なんてお邪魔虫な人だろう。

そのメールは剣治からのものであつた。

『名前を付けて下さい。』

・・・モンスターを仲間にした時に出てくるやつみたいだな。

「・・・実は君を創った人から連絡がきて名前を決めていいと言わ
れたんだ。君の名前を付けていいかな?」

「どうぞ」自由だ。

さて、名前はどうよつかな?

すでに当初の予定が変わった気がするが・・・。

「じゃあ、君は今日からハセだ!」

また、携帯がなる。剣治からのメールである。

『彼女が多分説明書を持っているので見せてもらひつ事。』

説明書をもらい、眺める。

『名前を付けた人が責任もつて世話をしてくれること。』

再度剣治からのメールが届く。

『浮気は駄目だよ時雨君。』

・・・・・・・・！？

頭で処理するのに少しかかってしまった。

「よろしくマスター。」

・・・・悪いが魔界に送りう。

「えっとね、魔王さんのところで働いてきてくれないかな？」

「ラジヤーマスター。」

瞬きした間に消えてしまった・・・。

またもや剣治から連絡が・・・。

『もしもし時雨君？一応は指令は成功だね。魔王さんからお礼の品

が届いてるよ。ちなみに賞品は家に行ってるからね?』

あけたらメイドさんは嫌だなあ。

そんなことを考えながら帰路についた僕はまだしるよしもなかつた事件が起こつていたらしい。これは後に書きたいとして、家に帰つた後も大変であつた。

魔王さんからのお礼は至つて普通。洗剤の詰め合わせと力 ピスの詰め合わせであつた。まるでお中元だと思ったが薔と美奈さんはご機嫌だつた。

「ちようど洗剤無くなつてたんですよーよかつたあ。」

「わーい! 力 ピスだ! 久しぶりに飲みたかったんだ!」

夕食を食べ終わつて少し暗くなつた外に一人で散歩しにいく。近くの外灯が点灯し、人影が僕の前に現れた。

「・・・時雨君、ちょっと話し相手になつてくれないかな?」

むろん、剣治である。しかし暗い顔をしているのは辺りが暗いだけではないようだ。僕は頷き近くの壁に寄り掛かる。

「・・・時雨君、そこはペンキ塗り立てだよ。」

「・・・何色? 黒なら大歓迎だよ。今黒の制服きてるから。」

「・・・ピンクだ。」

そしていつもより暗い剣治は唐突に話始めた。

「・・・実は理事長からの命令で他の学校に行く事になつたんだ。」

そして悪いが君まで巻き込まれたらしい。明日、僕たちは違う高校に行かなければならぬんだよ。だが、一年ぐらいで戻れるらしいからついて来てくれるかな?」

僕に迷う権利はない。

「いいともー一年ぐらい大丈夫だよー。」

溜息を出す剣治。

「ちなみに行く場所は男子校だよ。女子高生なんかいないんだが?」
はつきり言おう。今でかなり決心がゆらいだ。今にも壊れる建物ぐらい揺らいだ。

「大丈夫。一年ぐらいの辛抱だからね。」

「・・・そつか、じゃあ明日は家にいてくれないか?僕が迎えにいくから。」

そういうつて帰つていぐ剣治の背中はピンクにて染まつていた。

その後、家に帰り美奈さんと薔、執事さんにその事を報告。泣き出す一人を執事さんがなだめて決着はついた。(二人の口の中にクリをほうり込んだ後すぐに眠つてしまつた。)

「時雨様、しばしの別れですね。」

「ははっ、そうですね。まさかまた転校するなんて思つていませんでした。」

それから一人をベットに寝かせ僕も眠りについた。

そして朝。起きたら車の中であった。運転しているのは剣治の家にいるメイドさんで間違いはないだろう。

「やつと起きたかい？ もうすぐくへよ。」

剣治が身体をおこした僕に告げる。外を眺めると高校が確かにたつていたが前にくらべるとかなり小さい。

「そしてあれが僕たち一人が住む家だ。」

指された方向を見ると神社の近くに小さな一軒家が建っていた。

「え、寮とかじゃないの？」

「むさ苦しい彼らと一緒に生活するなんて僕の彼女達が黙っちゃいなによ？」

連れて来たのか・・・。

一番大きい部屋が剣治ではなく彼の彼女達つまりフィギュアとなり、僕たちはそれぞれ次に大きな部屋に入る。

「いやー大変だったよ。この家見つけるの。さて、学校にいこうか？」

？」

僕と剣治は同じクラスになり、至って平穏な転校だった。何故なら……。

「……このクラス僕たち一人以外に誰もいないよ？」

「大丈夫、他のクラスも対して変わらないから。」

昼休み剣治と共にかなり静かな教室で弁当を食べる。時折背中が寒くなるのはきのせいかな？

「お、君たちが新しくやつてきた転校生か」

男子生徒が一人入ってきた。

別に名前を覚える義務はないので男子Aとしておこう。

「この学校は来年で消えるからね。今更ここに來ても意味がないよ。」

きたくて来たわけではないことを話しておきたい。うおー！女子高生マジでいないね。先生もがつちりした人達だけだしなあ。

・・・・何考えているんだ？

剣治が僕を眺め鼻で笑った。

「僕には彼女がいるから必要ないね。」

いつから読心術を覚えたんだろう。それとも僕の勘違いだろうか？

その日は学校が終わるとわざと帰る事にした。

「これからはむせこ男子生徒とずっと一緒に居るのか・・・? (ヒヨロリとした男子生徒は存在しておらずかなりがたいのよろしい方が多い。)

不安だ。

そのへく 旅立ちは漢と共に・・・・。 (後書き)

読んでくれてる方々ありがとうございます。さて、今回からは一段落つけて一人には場所を変えて頑張つてもらいたいと思います。時雨君は不満げだから昔と違つているのが目に見えるぐらいわかります。そんな時雨君は次回事件をおこしてもらいたいと思います。最後に、普段評価してくれる人（名前は伏せますね。）ありがとうございます！

そのなな 目指せ！共学への道

あれから数日経った。

いまだにあつくるしいムキムキの男達に囲まれた学校生活だが、一つ気が付いた事がある。剣治と共に住んでいる家の近くに神社があり、そこには人が全くおりつかないらしい。今は寂れてボロボロの神社であった。そして学校から帰ってきた僕は何と無くその神社に行き、これから的生活で何かあってほしいと頼みにいったときの事である。

「さて、十円でいいかな？」

財布から取り出そうとして悲劇がおきた。

硬貨の中で一番高価なお金が落ち、賽銭箱の中に入ってしまった。

「・・・・。」

どうにかして取り戻そうとしたが無理であり、更にそんな光景を同じ高校の制服をきた人物に見られてしまった。しかし、その顔は初めて見るものであり、体格はほっそり。更に顔は今まで見ていた男達のようではなく白く美しいものであった。

「何やつてるんです？」

声も高い。

「いや、実は間違えて五百円玉を入れてしまって……。」

相手も僕に同情するような仕草を見せ、財布を取り出して五百円玉をだした。

一瞬、僕にくれるのかと思つたがその五百円玉は賽銭箱に進入。

「・・・これで貴方と一緒にですよ。気を落とさないで下さい。」

呆気にとられている僕を眺め、更にこう告げた。

「実は僕、不登校なんですよ。少々いじめられてね。だけど君転校生だよね?出来れば僕の友達になってくれないかな?」

差し出された手をしげしげと眺め気が付いた。この人は人間じゃないようだ。

「・・・はあ。別にいいですよ。」

握手すると謎の少年は立ち去ってしまった。僕も帰らうと思いつと無く下を向くと五百円玉が落ちていた。

「・・・・。」

偶然だろう。

自分の部屋に入るとびっくり!置いた覚えのない美少女フィギュアが数体並んでいた。今まで置いていたガンムのプラモは隅に隠れるようにしてたつている。

侵略。間違いない!剣治が僕の部屋に入り、陣地を確保していくのだろう。

「・・・明日プラモを買ってきて棚に飾つておひづ。」

そうすれば剣治は手出しできまい。・・・多分。

そして次の朝。

剣治はすでに学校にいつており、僕も急いで朝食をとり学校に登校。げたばこをあけると手紙が入っていた。（こ）は男子生徒しかいなはずなのでラブレターの可能性は低いはずである。もしかしたら・・・という可能性もあるが、多分番長かなんかが僕の事が気にくわないんだろう。（やはり中身は体育館裏にくるようにとかかれていた。

放課後、一人で体育館裏に行つてみると先客がすでにいた。

「・・・やい、このおかま野郎、またノコノ「学校にきやがつたな？」

今は隠れて虚める奴らが多いと思っていたが、古風な人もいるもんだ。しかも舎弟の一人に押さえられている相手は昨日の人である。

「・・・僕はおかまじやありません。」

一応抵抗はしているみたいだが、あまりに無力に見えたので助ける事にした。・・・この事件がキッカケで僕はまたあらたな厄介な出来事に巻き込まれるのである。

始まり、それは唐突に・・・。

僕はまず、話し合いで解決しようと努力してみた。

「あのー、すいません。林檎一個とその人を交換しませんか?」

「ああ? 時代は光なのに何言つてんだ? 物々交換の時代は終わつたんだよ! 」この前日本史で習つただろう? 「

意外に勉強熱心な不良である。暑苦しいので今回は悪いが眠つてもらおうかな?

『私は、・・・・』

ドカツ! ボキツ! ? べしゃあ!

取り巻きも含め、彼を囲んでいた全員を夢の世界に連れていった。唚然としながら僕を見ていた彼はなんと僕に抱き着いてきた! (言つておくが、僕にそつちの趣味は全くない。)

「ありがとう! 僕を救つてくれて! 騎士様どうぞ貴方の彼女にしてください! 」

「いえ、遠慮します。大体貴方は男ですよ、ちゃんとぶら下がつてるでしょ! 」

男に抱き着いてこられるのは面倒なので股間を蹴ろうとして気が付き、慌てた。

「この人、男の勲章がないのだ!

「・・・貴方、もしかして女の子とか? 」

「ばれました? 実は女の子なんですよー小さい頃から男みたいに育てられてきたんですけどね」

「・・・そうですか、それは大変でしたね？」

悪いが今日は疲れていたので帰らせてもらひつ事にした。だが・・・
・・。

「そんな一つれないですよー今日は私が面白い所に連れていってあげますよ。」

胸を押し付けてきたので悪いが僕は鼻血を出し、昏倒した。（ずっと男といふからだらうか？）

次に目が覚めたのは保健室でも自宅のベットではなく何処かの家の布団の上であった。多分、先程の女の子の家ではないかと思う。部屋を見渡してみるとかなり凄い。辺り一面柔道や剣道、相撲に関係するものがおいてある。なかにはだれだれが使っていたふんどしなんてものもあるくらいだ。

「あ、大丈夫だった？」

部屋の扉が開き、女の子が入ってきた。そして後ろからもう一人入ってくる。

「はじめてまして、私はこの子の姉です。」

「うーん、美しい。まるで絶世の美女だ。」

・・・・なんて歯の浮く台詞なんだろう。僕は黙つて話を聞いた。

「あの学校はね、来年共学になるのよ。」

そう、これからこの共学についての争いが幕を開けるのである。彼女達は共学に賛成なのが、残りの男子は反対らしい。（僕も

賛成。）何故かは不明なのでじきにわかるだろう。今日は一回、家に帰ることにした。帰り際に一人に自己紹介された。

「助けてもらつた私が平塚満で私の姉さんが・・・」

「可奈子です！以後よろしくね？」

「うーん、うれしいなあ。可奈子さんのはうはあの男子高校ではないらしいが、関係はしているらしい。家に帰り、先に帰宅していた剣治に共学の話をするときの事は知っていたとばかりに話始めた。

「・・・実は今回の転校は共学を実現させる為に行われたんだ。つまり、僕たちが共学にした時点での事が出来るんだよ。後、一年たてば共学になるけど一年以内に何とかして共学にすれば僕たちは帰れる事ができるのだよ。」

知らなかつた。

そしてどうやつたら共学に拍車をかける事が出来るかといつと。「反乱分子を全てなくせばいいんだよ。」

恐ひしい事である。しかしまあ、力で捩伏せる事はないだろう。

「さ、時雨君今日はもう寝ようか？明日から大変だぞ？」

次の日、あの事を忘れていた僕はちょっとマヌケかもしれない。

そのなな　目指せ！共学への道。（後書き）

さて、今回ようやく？新人が出てきました。まあ、物語にも進展はありましたがね。いかがでしょうか？ 最後にこれからは慌ただしくなる予定ですが、一つよろしく頼みます。

そのはち 貴族眼帯と竹刀（前編）

あれから数日経ち、校内での反対活動が始まった。
それは異様な光景である。

毎朝、希望者達が集まり廊下をフンドシ一つで練り歩きながら『共学反対』と叫んでいるのである。

そしてもうひとつ変わった事がある。僕が廊下に出たりすると男子生徒は全て逃げ出すのだ。剣治が言つては僕が氣絶させた相手はこの番長であり、全校生徒で喧嘩をうつたが負けたらしい。つまり、それを倒してしまつた実質この男子校の番長になつてしまつたのだ。まあ、実は男子生徒にひかれる理由はこれだけではない。見た目は美男子だが、中身は女の子の満さんが僕に学校中ベッタリくついてくるのだ。それにより、僕には男好きとのレッテルが張られ剣治以外に男子生徒は話し掛けくれなくなつた。

はつきり行つて早くこの高校から脱出したい。そして今僕は共学の道を開くためいろいろと頑張つているのである。そんなある日それは朝から始まりを告げる事件である。

「時雨君、今日は剣道部から当たつてみようか?」

・・・・・ついに始まるのか、剣治による生徒会長への栄光のロードが・・・。

昨日賢治から聞いた共学促進の方法。

まず、剣治が生徒会長となり全校生徒を掌握。共学を温める。そして無理やりでも良いので全ての生徒の署名を集めて教師に渡す。これが今の所の作戦である。

そしてその作戦を実行させるためには今の生徒会メンバーを倒していく、全てのメンバーを仕留めれば生徒会長に挑戦できるのだ。（この学校では凄いことに生徒会長を倒せば生徒会長になれるらしい。）だが、生徒会長は人間ではないという事を健治に聞いた。そして、その生徒会長は今は不在らしく、なんでも誰かに負けたので修行に出ているらしい。つまり今メンバーを全て倒せば会長不在で強制的に会長になれるのである。

「剣道部の首はすぐそこだ。」

剣治が意気揚揚と答えているが何か考えはあるのだらうか？相手は剣道部の首領である。鞄を持って剣治と一緒に家を出ると満さんが立っていた。

「や、学校に行きましょう。時雨君。」

・・・なぜ誰も女の子ときがつかないんだらう。声も女の子だし、風体も女の子の体つきである。

「やれやれ、朝からおあついねえ。お邪魔虫の僕は先に学校に行ってるよ。」

剣治はダッシュで走り去り、それを慌てて追いかけようとした僕は腕を満さんにつかまれて阻止されたのであった。

「時雨君、逃げちゃ駄目だよ。」

・・・人生逃げなきゃいけないときだってあるんですよ。

「あ、空にスカイファイッシュが大群で飛んでますよ。」

「え、あ、ちょっと待つてよ時雨君！」

脱出成功！

「甘い！甘いよ時雨君。この私から逃げるなど不可能。」

振り返ると既に満さんの姿はなく気が付くと僕の隣を走っていた。

走っているところより浮いているのだ。

「足なんて飾りだよ。

えらい人にはそれがわからないんですよ。」

うわ、仮面をつけた赤色大好きな人が言いつつなせりふだなあ。
だが、僕だってつかまる気はあまり無い。

『私は、天界魔界を統べる罪深き天使といつ名の悪魔。』

あたりの時間を止めてついでに逃げをさせてもらおつか？

だが、世の中上手くいかないのである。満さんはさつさと僕にしがみつきプロレス技みたいな事をしてきた。よってこの状態で次官を止めると僕も動けなくなってしまないので、今日は諦めることにしたのである。

やれやれ。

そしてその頃学校では緊急の話し合が行われていたのである。

「このたび緊急に集まつてもらったのはボランティアの空き缶集めのためではない。」

「では、何のために我々生徒会メンバーが集められたのだ。」

「転校生霜崎剣治と天堂時時雨が生徒会乗つ取りを田論んでいるらしい。今、生徒会長は修行のたびに出てこるのでメンバーがすべて倒されたらやばいんだ。」

「まず、剣道部の不思議眼帯が止めてくれるだらう。剣の腕は生徒会長の次にうまいんだからな。しかし世の中は凄いものだなあの生徒会長をしおぐ剣士がいたなんてな。」

「そうだな。うわさでは生徒会長はハリセンにまけたらしこからな。」

「そんな話し合いがあつていたのであつた。」

そして所変わつて剣道場。既に先に言つていた剣治に追いつき、ただいま僕は、剣道上のハジに座つてゐるのである。

「ねえ、剣治剣道部の首領はどんな人なの?」

これに答えたのは剣治ではなく僕に引つ付いてる満さんである。

「変な眼たいさんだよ。みてみればわかるよ。」

いきなり太鼓が鳴り響きレッドカードペットが入り口から転がってきて、目をつぶつている剣治の前で動きを止める。そして入り口から入ってきた人はギャップの激しい眼帯坊ちゃまであった。

まず顔は右田をしるーい包帯でぐるぐる巻きにしていてその包帯を頭に巻いて背中にたらしている。鉢巻みたいにしてこるのである。更

に包帯のつえから黒い眼帯をつけていて、きている服は「ヒヒ」している服である。苗の貴族のよつな格好である。

「君が、異分子かい？」

きだみたに話しつける包帯さん。だが剣治は黙つてゐるので仕方なく僕が答えることにした。

「はい、そうです。あ、すいません自己紹介がまだでした。彼の名前は・・・・・」

貴族眼帯さんは手で僕を制しどこから取り出したのか赤いバラを手に持ちキザつたらしくいうのである。

「ふ、わかっているぞ。剣治君だらう？
その先を言おうとして眼帯貴族さんはしゃべれなくなってしまった。なぜなら・・・・。

剣道場の窓が割れて、竹刀が目の前掠めていき貴族眼帯さんのおでこに直撃。その場に倒れてしまった。

剣治は田を開き敵が外にいるらしことを悟ると外に出て行つてしまつた。僕は慌てて眼帯貴族さんを起しに行く。

「眼帯貴族さん大丈夫ですか？」

何とか田を開ける眼帯貴族さんは虫の息である。

「少年、私の名前は眼帯貴族ではない・・・・」

だが、この言葉も長くは続かなかった。

一本目の竹刀が眼帯貴族さんにつりヒツト。今度こそ彼は気絶してしまった。悪いことは続くようで、倒れた彼に窓を突き破り新たな人物が眼帯貴族さんのつえに飛び乗つたのである。

「ぐええ。」

悲痛な叫び声を上げ動かなくなる眼帯貴族さん。

「ふふつ、弱いわよ兄さん。」

そんな彼を見下した田で眺めているのは多分彼の妹であろう。

「・・・・・・」

唖然としている僕に気がつき手に持っている竹刀を向ける。

「あなたが道場破りの愚かなお方かしら？」

ショートカットの女の子は僕を見下ろしている。だが、僕は答えることが出来なかつた。

「時雨君、鼻の下が伸びてるよ。」

恥ずかしい限りである。僕の視線は彼女のはいているスカートに目がついていたのである。視線に気がつき慌てて隠す謎の竹刀娘。そこで剣冶が戻つて來た。

「時雨君。君は災難な男だな、一度厄払いしてもうつたらどうだろ

うか。」

剣冶からまた竹刀娘に視線を移すと彼女は必ず黒いオーラと共にそれを出していったのである。

「……」の変態め、覚悟してもらひつい。

竹刀を振りかざし僕に迫る竹刀娘。

「……」めんなさい。つい、出来心でめてしまつたんです。ホントすいません。」

一応、謝ったが無意味のようだ。

「……」の世で遣り残したことほ無いか?

ありすがて話にならない。

「やれやれ、そら受け取りたまえ時雨君。」

竹刀を渡されたので間違いなく戦えといつてこるのである。

「無に帰りなさい。」のスケベやローラー

竹刀が振り落とされたのでよける。昔の僕ではよけれないだろうが今僕にはできるのである。

剣道場の床が抜けた。勿論、竹刀の一撃によるものである。

「……その一撃はすいかわりに使ってください。」

「却下だ。」

逃げきめが繰り出される前に勝負に出る。持っていた竹刀をしない娘の頭に叩き込む。ここでバトルものだつたらかっこよく決まるものであったが、僕の竹刀には仕掛けがあつたらしい。

竹刀の先が既に竹刀ではなくハリセンになつていたのである。どんな手品であろうか？

かくしてあつやうと勝負に終止符が打たれたのであった。

放心している竹刀娘の目の前にハリセンを振つてみる。だが反応なし。眼帯貴族さんもいまだにレッヂカーペットの上に倒れたままである。

「さて、時雨君、満さん教室に帰らうか？」

結局、現状そのままにして教室に戻ることにしたのである。廊下では誰にも会わずに教室にたどり着いた。そして、廊下ではふんどしをつけた男達が歩き始めたのである。剣治はじばし黙つていたが黙つて立ち上がり教室を出て行つた。

「しばらくお待ちください。」

・・・少々何かを殴る音が響いたあとに剣治が戻つてくる。ホッペに赤い何かがついていた。

「・・・剣治、口に何かついているよ。」

「ああ、僕としたことがいけないな。ケチャップがついてしまつて

いたようだ。」

平然としている剣冶だが、廊下のほうからはつめき声が聞こえるのは僕の幻聴だろうか？共学の道を早く実現させなければこの学校から生徒はだんだん消えていくのかもしれない。

そのはち 貴族眼帯と竹刀（前編）（後書き）

いやいや、近頃大変なので最新遅れました。楽しみにしてくれていた人々に申し訳ありません。さて、今回からついに生徒会と時雨軍の戦いが始まりました。まあ、ようやくエンジンが動き出したみたいなもんですが、これからも宜しくお願ひしたいと思います。意見がありましたらどうぞ文句つけてくださいね。

そのきみづ 貴族眼帯と竹刀（後編）

昼休み。がやがやと騒ぐ廊下であるが僕と剣治、満さんは教室で昼食を食べている最中であった。

「……時雨君、今日の弁当を作ったのは君だったよね。」

「うん、そうだよ。」

「このロボットが何で作ったのかな？あまりにも手抜きをしてないかな。」

「・・・」のん。

剣治の弁当の中身はリソバの山盛りであつた。

「・・・やれやれしようがないな。」

一人でそんなことを話していると満さんが話にかたつってきた。

「二人ともおかしいと思わないの? 今田の朝倒した眼帯貴族の事。」

あれは彼の妹と思われる女の子が倒したものである。

そんな」とを語りでしょと校内放送が闇に飛ってきたのであつた

『えーと、本日の朝剣道部首領と戦つた人は今すぐ剣道場に来て下さい。繰り返します・・』

三人で顔を合わせると剣治と満さんが僕を見ている。

「・・・早く行きたまえ、時雨君。」

「うそ、早く行ってきたほうがいいよ。」

「・・・僕だけ?」

頷きあつ一人。

「大丈夫だ、僕もこの弁当を食べたらすぐに向かう。ちなみに僕はあまりリンクゴは好きでは無いな。」

「私もお弁当食べたらすぐに行くから頑張ってね。」

満さんのお弁当箱はかなりでかい。食べ終わるのにかなりの時間を有するであろう。僕はしうがなく立ち上がり剣道場に続く廊下を一人むなしく歩くのであった。

剣道場にはいるや否や竹刀が跳んできた。

「うわあ。」

危機一髪でよけると新たな竹刀が跳んできた。

・・・・・いつから僕は竹刀にすかれるようになつたのであるうか。結局一本目に跳んで来た竹刀を拾い上げて飛んでくる竹刀を叩き落す。まあ、実際の所ちょっと当てるぐらいで竹刀は落ちてくれたのだ。

竹刀が飛んでこなくなつたので奥に進むと一人の人間が僕を迎えてくれた。

一人目は眼帯貴族さん。そしてもう一人がその妹と思われる人物である。

「ふ、なかなかやるじゃないか。」

眼帯貴族さんは右手で髪をかきあげながらそんなことを口走る。

「兄さんが投げたわけじゃないせにえりゆつにしないでくれる?」

その反応に頭にきたのかその妹が反論する。

「・・・あの、早く用件を言つてくれませんか?」

「そのままにしておいても時間が無駄に過ぎると思つるので僕から話をすすめることにした。」

「なに、簡単なことや。君が戦つてればいい」とだからね。」

「どちらと戦えばいいですか?」

僕の視点から見るとこの人たちはかなりのやる気を見せてくるようだ。

「むりむり」

そこまではもつたが、

「私」
「僕」

見事に分かれた。

「・・・兄さんにはまた眠つてもらおつかしら?」

となりにいる兄に問答無用で竹刀を叩きあらすその妹。あまりに話がとんとん拍子に進みすぎているのでとてつもなく違和感を感じてきた。

ドグオ。

痛々しい音が剣道場に響き眼帯貴族さんはその場に倒れふしたのであった。

「自己紹介がまだでしたね。」

竹刀を振り回しながらこちらをふりむく竹刀娘。

「・・・いえ、自己紹介をしてくれなくて結構ですよ。」

僕の意見としてはこれだけいえることは間違いない。できればこれ以上おかしな人たちがでてきても困るのである。つまり、竹刀娘が自己紹介をしてしまうと彼女とは知り合いになってしまい、下手すると毎日竹刀が僕に飛んできそうな感じがするのである。

「遠慮しないで結構よ、私の名前は柳涼（やなぎ すず）よ。覚えておきなさい。ちなみに呼び捨てで構わないわ。」

・・・・。

「しょうがないか、あきらめよつ。そつちで氣絶している人の名前はなんていうの？」

涼は僕が指さしている人物に目をやつたが
堂でもよさそうな顔をした後に、

「そんなの気にしなくて結構よ。あなたはエキストラの名前がそんなに気になるの？」

少々眼帯貴族さんがかわいそうである。

「うう、ひどいよおー涼が虚めるよ。その君、こんな悪い奴成敗してくれ！成敗してくれたらこんな妹君にあげるよー！」

「いつのまにか僕の足元に来てそんなことを言つてこる眼帯貴族さん。

「おだまつ！」

飛来してきた竹刀により眼帯貴族さんはまたもや虫の息である。

「・・・もう、そもそもお迎えが来たようだ。へへっ、こんな俺でも天国にいけるのかなあ？」

そのまま田をつぶる眼帯貴族さん。ああ、惜しい人を無くしたものである。

「兄さん、早くやじからじこでくださー。」

むくりと起き上がり剣道場の隅に座つて僕たちの決闘場を作つてくれたのである。更に。

「あの凶暴な妹に勝つたら僕は共学を共に田舎すよ。」

これは絶対勝ちたい勝負である。そして最後に小声で言つのであつた。

「そして副賞として年頃の男の子には嬉しい本をプレゼントしたいと思います。」

・・・負けられない。必ず僕はこの涼に勝つて見せる。

「やうねえ、普通に剣道のルールでやつたって面白くないから倒してロープで縛り上げたほうが勝ちにしましょ。」

つなづく僕を見てから眼帯貴族さんが僕に手招きをする。

「・・・いいかい、彼女はそういうのが好きみたいだからね、もしも勝負に負けたら大変なめにあつから氣をつけのんだよ。」

そんな忠告までしてくれたのであつたが、

「兄さんも同じようしてあげるわ。」

その言葉を聞いて震ざめて失神してしまつた。

僕としては戦つている最中の事をあまり話したくないので結果を

言いたい。結果は僕の楽勝である。しかし、僕はロープで涼を縛るなど到底出来ずに困ってしまった。一応手にロープは持っているのだが、元からそんな趣味を持つてない僕はただただ疲れて寝転がつている涼に説得するばかりであった。

「…………お願いだから負けを認めてくれないかな？」

「嫌だ。それならさっさとロープを私の体に巻けばいいでしょ。」

すでに午後の授業は始まっているようだし、僕がさっさとしなければどんどん遅くなってしまうのである。

「…………なんかいうこと一つだけ聞くからさ。」

「…………ふん。」

（こ）で僕が取るべき行動はなんだろうか。縛ってしまったら剣冶から今後変態を見るような目つきで見られるにちがいない。
…………いや、いつそのことばれないようにやってしまおう。

早速僕はそれを実現するためにロープで彼女を縛ったのであった。

…………誤解が無いようにはっきりいつておぐが縛ったといつても形だけである。彼女が動けばロープはほどけてしまうし、立とうと思えば簡単に立てるようになってしまっているのである。それをきよとんと眺めていた涼だが、僕は失神している眼帯貴族さんを抱えて剣道場後にした。

ちょうど休み時間になつたのである。廊下には生徒が出ていて僕を見てさっさと引っ込んでいった。教室からはひそひそ話が聞こえてくる。

「剣道部の首領結構かつこよかつたからとうとう転校生の餌食になつたか・・・。」「

「俺達も氣をつけないとあの転校生男好きらしいからな・・」

僕は溜息をついて眼帯貴族さんを保健室に連れて行つたのであった。

その後は自分の教室に戻り、剣治たちに状況を報告。剣道部は落としたと告げた。

「まあ、当然といえば当然かな。この調子で頑張つていこうか時雨君。」「

「うん、頑張つてね時雨君。生徒会を叩くな今しかないよ。」

これからもまだまだ共学を果たす夢は大変と推測できるのは簡単なことである。ちなみにこの二人には涼の事は言わなかつた。なぜならややこしい状態になるのは編物を知らない人がいきなり始めるのと一緒にだからである。

その後特に何もなく平和に過ごした後、帰宅となつた。

こっちに来て少し経つので薔や美奈さんの事が気になるが元気でやつているとしんじよう。剣治と一緒に家に帰りつき自分の部屋の中に入ると大きなダンボール箱が置いてあつた。過去一度似たようなことがあつたので不安になつた。剣治に尋ねてみたが彼は知らないといつているので別に危険なものではないと思われる。

あまり気は進まなかつたが、開けることにしてみたのだが、さすがにゆきを必要とした。

「…………えいっ！」

「わいわいを開けると中からあまり見たくないものが出てきた。

…………涼である。そして眠っているその隣には手紙が置いてあり、それには簡潔に文字が書かれていた。

『約束通り君にプレゼントだ。安心したまえ、ちゃんと本人の許可是取ったからね。』

いやいや、許可とかそんなあれじゃがないだろ？！こんなことをしている場合ではない、急いで送り返さなければ剣治に見つかってしまう。

当然、あの剣治に見つかれないようには運ばず、笑いながらずっと僕の後姿を見ていたようである。

「部屋は共同で使ってくれたまえ、別に時雨君が嫌なら他の部屋で寝るなさいこいんだがね。」

既に僕の部屋以外には美少女フィギュアがおかれていて、そんなところではあまり寝る気はない。

とりあえずは涼が起きてから帰つてもう一つとして何気に小さくかれている部分を読ませてもらおう。

『約束の物は明日の放課後、体育館裏で手渡したいと思つ。』

あれである。僕にとつては一度と手に入らないと思われていた本なので、少し気が緩む。

「……時雨君、顔がにやけてて気持ち悪いぞ。」

剣治にしてきされてしまった。

そして、その頃学校ではこんな事があつていたのである。

「おい、あつさりあの剣道部首領がやられてしまつただ。どうするんだ。」

「……安心しろ、既に次の手は打つてある。それに今まで音信不通だつた生徒会長から連絡があつた。もう少しで帰つてくるそうだ。」

「ほお、それはいい知らせだな。」

この事は時雨たちは知らなかつたし、このあくどそうな人たちも剣道部首領が本当は妹にやられたこと知らなかつたのである。そして謎の生徒会長が時雨たちと対決する口はそつかからないかもしないのである。

そのあと「貴族眼帯と竹刀（後編）（後書き）

えーっとまことに前誤字の指摘をしてくれた方有り難うございま
す。多分言われるまで気がつくことはなかつたと思います。さて、
今回は後編でしたがなんとなく前とつなげることが出来ていなかつ
たので自分としては少し悲しいと思つてゐる所です。そして次は歯
切れの良い？十話目になりますね。普段の進行はいつも二人です
が題名も変わつてるのでコンビも変えたいと思います。

やのじゅつ はぴばあすでい

「やつてきましたー記念すべき第十回目。同会は私薈と・・・」

「時雨様の心の支え、冥土の美奈です。」

「・・・・・わて、そんなことより私達の出番が全くないのぢつとも面白くないです。」

「そうですね、時雨様はまた新たな女の子と仲良くなつてこらみたいです。」

「・・・・・氣を取り直して今回の話は・・・」

「一人目の強敵?を倒した週の休日の話です。」

「ここに宣言ー今度こそ絶対兄様のもとに行つてみたい!」

「・・・・・諦めてください。」

・・・・・・・・・・・・・・・

あれから、数日経つた。いまこの家の住人の一人になつた涼は僕の部屋の半分を占拠している。更に困ったことに僕はベットに寝ていたが今では涼に居座られていて、床に寝ている。そんな日

が数日続き、休日がやつてきた。

「…………うーん。」

僕は田を覚まし体を起こす。そしてベットに居座り安らかに寝ている涼を見て溜息をつく。今は安らかに寝ているが夜になるとすさまじい。なぜなら彼女は僕より早く寝て、盛大ないびきをかけて眠るのだ。この行為によりなかなか眠れない田々が続き、授業中に寝てしまいそうな状況にも陥っているのである。

「ほり、涼朝だよ起きて。」

肩をゆすって呼びかけてみるがあまり反応はないようだ。

「…………あと10秒以内に起きないとたゞりしちゃうぞ。」

そう耳元で囁いてみるがやはり反応なし。仕方なく実力行使で起こすことにした。

まず枕を取り上げてみる。・・・起きない。そして次に布団を剥ぎ取つてみるがやはり起きない。そして最後の手段。ホッペを両手で引っ張つてみる。

面白い顔になりながらも起きてくれないのである。そのままほつておぐと涼は機嫌が悪くなることは既に学習している。

「…………うだ。」

鼻を押さえてみると効果絶大。苦しそうな顔になり田を覚ましてくれたのである。

「おはよ。」

せうに手を離してあげると、それをジーットみてるのである。その光景が一分ほど続き、涼は田をパツチリ覚ました。

「…………ああ、おせよう時雨。」

顔を洗わせるために立ち上がる。近頃はこれが習慣になつて、この田も涼をしぐら眺めてみる。髪は方まで伸ばしているが普段から少々ぼさぼさである。この前は剣道場の床を破壊した実力を持つているが一見するとほつねつとしてどこにそんな力をもつているか不思議である。

「…………ちよつと時雨朝からなに見てるのよ。」

胸の部分を隠して僕から離れる。しかし実際の所は発育が送れて、このと思ひのは僕だけではないと思ひ。

「ふん、私は他の子より少ししだけしか小さいありますよ。」

わう言ひて部屋から出て行つた。別に涼の胸など見ていないし、たちをつくるわけでもない。やれやれ、僕はなに言つてんだか・

「やあ、おはようおはよう。昨日よく眠れたかな？」

「やうこつて剣道と共に溜息を出す。」

「……涼やくは昨日も一段とよく眠つていたみたいだね。」

「うん、朝なかなか起きてくれなかつたからぐつすり眠つてたと思つよ。」

今日の朝食当番は涼なので、朝食ができるまで剣治の部屋の前で立ち話をする。剣治の部屋に入るとな々気が引けてしまつので廊下で話しているのである。

「・・・今日は休日だからね、時雨君は暇だろ?..」

「あ、うん暇だけどどうかしたの。」

「・・・今日は涼さんの誕生日だろ?」
この前彼女が『今週の休日は私の誕生日だ。』と言つてたじやないか、だから時雨君、君は涼さんを連れて何か買つてきてくれないかな。なーー!プレゼントの代金は僕と君の半分ずつで出せばいいんだから。』

その案には賛成であるが、何を買えばいいのである?。

「・・・大丈夫、彼女に必要で僕たちの夜を守ってくれるものtoPromiseいんだよ。それは安眠枕しかないだろ?。」

その意見には大いに賛成である。

「わかったよ。」

そう答えると剣治は薄く笑いかけてその場に倒れた。

「・・・今日は涼さんの誕生日だろ?」

この前彼女が『今週の休日は私の誕生日だ。』と言つてたじやないか、だから時雨君、君は涼さんを連れて何か買つてきてくれないかな。なーー!プレゼントの代金は僕と君の半分ずつで出せばいいん

だから。」

その案には賛成であるが、何を買えばいいのであるか。

「……大丈夫、彼女に必要で僕たちの夜を守ってくれるものを探してもらいたいんだよ。それは安眠枕しかないだろ？」

その意見には大いに賛成である。

「わかったよ。」

そう答えると剣治は薄く笑いかけてその場に倒れた。

どうやら眠っているようだ。昨日は遅くまで起きていたからとうとう限界が来たにちがいない。僕は剣治を抱えあげ彼の部屋に入り込んだ。その途端異質な空間をかもちだしている物に気がついてさっさと剣治をベッドに放り投げて退散したのであった。

それから朝食を食べに食卓に付いてみると結構いろんな料理が並んでいた。目玉焼き、アジのひらき、味噌汁、その他もろもろ。しかし、それだけでは終わらないのであった。

「……張り切つて作ってくれたのは嬉しいんだけどさすがにこれはちょっと……」

和食の隣には洋食のラインナップも充実しており、トースト、ヨーグルト、サラダ、その他いっぱいの料理があいてるのであった。

「えー、別にいいじゃない。食べても死にはしないよ。」

そりゃそうだろうが……

「それとも今日の朝食はぬかすの？」

「いえ、何にも文句あつません。」

「ひつして朝食は始まつたのであつた。

それからすべての料理を食べ終える」となど不可能であり、開始三十分後僕は早速苦しかった。

「もう無理。食えない。」

「・・・・やうね、さすがに作りすぎたかしら。」

そして今日の朝食はすべて剣治の分となつたのである。それから僕は洗物をしている涼に話し掛けた事で先程話し合つた事を告げた。始めはきょとんとしていたがだんだん笑顔になってきた。

「ありがと、そういうことなら準備してくれるね。」

少々きつめの田をしているが笑つた時の顔はたとえるなら・・・ そうだあ、般若がにやつとしたような・・・ではなく子犬が笑うような笑みという事にしておひつ。そんなことを考へてみると涼がこつちに戻つて來た。

「剣治さんも行くの？」

なぜか涼は剣治をさん付けで呼んでいたのだが、僕を呼ぶ時は呼び捨てである。

「うーん、剣治は寝てこるからそのままにしておいたほうがいいと

思つよ。」

「じゃあ、一人で行くの?..」

まあ、結果的にいうならそつなるだろ?。
僕がうなずくと涼はまた部屋に入った。扉越しに声が聞こえてくる。

「覗かないでね。」

…………覗くほど価値のありそうな御方がいられるのか
僕は聞いてみたいと思つたが聞かないでおくことにした。そんなこと
をいうと竹刀が僕に牙をむきそうな雰囲気があつたからである。

そして部屋から涼が出てきたので早速外に出るにした。だが、
僕はまだこの土地になれたわけではないので詳しくわからない。
結局、涼に道案内をしてもらうことになった。

そして気がついたことが一つある。町ゆく男達はみんなして涼を
まじまじと眺めて溜息をついているのだ。
中には、

「……美しい。」

なんて恥ずかしいことを平然と言つてゐる人もいる。

・・・・僕にはどこがどう綺麗のかわいっぱいわからない。そして中には涼に声をかけてくる人もいた。

「どう、そここの可愛い女の子これからお茶しない?」

「いつの時代の口説き方であろうか?今度誰かに聞いてみたいと思う。」

「じゃんなさいね、今の私には無理です。」

性格をじりりと変えてそんなことを平然と言つて居る。やれやれ、本性知つたら結構いなくなるんじゃないかな。

「今、私には彼氏がいますから私が今度一人の時に声をかけてください。」

「へえー彼氏ねえ。そんなのビックリするんだろうが?涼は僕の手を引き寄せ僕の腕に抱きつぶ。

「ラブラブなんですよ。」

・・・・・すゞし退散していく氣の毒な男性の方。僕は涼に手をとられたままの背中眺めていたのであった。

「ども、彼女のいない時雨にしたやかなプレゼント。」

「・・・・・そつやべりむ。」

そんなことでついたのはテパー。ト。

「何買つてくれるの?」

「…………安眠枕。」

途端不思議そうな顔をして僕の真正面に立つ。

「安眠枕？」

その用はなぜやうなのが不思議そつだあつた。

「いや、ほり涼はもっとぐっすり眠れるだらう！だから安眠枕を涼に上げるんだ。」

「ふーん、まあぐっすり眠れるならいいけどね。」

「…………僕もこれでぐっすり眠れるから大助かりだよ。」

「…………なんか言った？」

「い、いや何も。」

この後なぜか涼は顔を赤くしながら僕を案内してくれたのであつた。なぜかはわかるはずもない放つておくことにしよう。

安眠枕は色々種類があつたので本人に選んでもらうこととした。

「それじゃあ、これがいいや。」

そう言つて選んだのは抱き枕並みの大きさの安眠枕である。ちょっと値段がきつかつたがどうせ剣冶とのわりかんといつやつである。その後一人でいろいろなところを回つてみたりもした。そんな中

本屋にこの前あつた気がする人物が僕に手招きしていたのである。僕の目が正常であるならばその人物はこの前の眼帯貴族さんであることは間違いないだろう。僕は涼に少々トイレに行って来るといつて本屋に入つて行つた。

「いやあ、また出番が来るなんて思わなかつたけど登場できて嬉しいよ。さてそんなことより意外と楽しそうで良かつたよ。」

「はあ、それは別にいいんですけど・・・」

彼が手に持つている本はそのあれである。まあ、年頃の男子生徒がもしかしたら隠し持つている類の本である。

「しかし向で僕に手招きしたんですか？」

「いやりと笑うその顔は持つていて本の影響力もありなんとなくあくどい感じのする笑みであった。

「いやあ、涼は僕を見かけると襲つてくる可能性が非常に高いからね。」

かわいそーだと同情している自分であつた。眼帯貴族さんはしみじみしながらも思い出したように僕に一つの手紙を渡した。

「家族からの手紙だといってこれを渡しておいて欲しい。」

「はあ、わかりました。」

彼はそういつて本を片手にカウンターに消えていった。

僕は早くその手紙を私にいったのだが、涼はトラブルに巻き込まれたみたいであった。

「そこのかわい」ちゃん、僕と付き合つてよ。」

「いやだ、放せばか。」

途端顔が真っ赤になり起こつた顔になるナンパ男。

「んだうひらあ。」

・・・・急いで止めに入らなければあの男の命はないかもしれない。今更気がつくのも相当鈍感だと思ったがあんな数の竹刀を投げれる人間はこの世にいるはずがない。つまりこう彼女は人間ではないこととなる。

僕は急いでナンパ男に後ろから掴みかかり説得することにした。なぜなら目の前の涼の背中には黒いもやもや、つまりこう悪魔の羽が出現しているからなのである。

「落ち着いてください。」

「何だてめえはー。」

じたばたしている男を押さえながら涼を見てみるといつのまにか竹刀を持っていた。そして竹刀を蒼い光が包み込む。

「すいません、悪いんですがあなたには気絶してもらいます。」

ドゴオ。

倒れた男から手を離し涼を抱えその場から撤退する。当然のよう
にこのデパートにも警備員という方はは存在するわけだからこそこ
そなどでお客様を護つたりするもんである。そして今回の悪者にな
る確率が高いのは僕である可能性が高いような気がしたからその場
から逃げたのである。

そのまま家にかえる為に涼を担いだまま町の中を駆け抜ける。さ
いわいまちで人を見かけることはあまりなかつたから女の子をさら
つているようには誤解されなかつたようである。家に帰り着いて涼
を下ろす。その顔はなんとなく恥ずかしそうであつたがなぜだかは
僕にわからない。彼女は短く、

「あらがとう。」

とだけ告げて部屋（僕の部屋である。）に入つて鍵までかけてしま
つた。

「…………お帰り時雨君。」

剣治が顔を出しじつとやつてきた。顔色はすこぶる良いつみたい
なのではつとした。

「今日はぐっすり眠れたから良かったよ。彼女達が僕を看病してい
てくれていたからかな？」

「…………それはよかつたね。」

そして、今度は僕がその場に倒れる番であった。当然の事だとお
もつて欲しい。今日は歩き回った上に最後には走つて帰ってきたの
だから体がぼろぼろなのである。おまけに寝不足も手伝つているの

だ。

僕はそれから晩御飯時に田を見ました。僕の部屋のベットに眠つていたことに気がついて体を起こうとする扉が開いて誰かが入ってきた。

「やれやれ、やっぱり君も寝不足で倒れたのか。」

ピンクのエプロンをつけている剣治はお玉を片手に持つてゐる。

「早く起きなよ、それから君に手紙が届いてるよ。」

渡された手紙の差出人は不明であるが内容は僕も忘れていたことであった。

『兄様、お誕生日おめでとう。』

・・・・・今日は僕の誕生日でもあったのである。剣治は更に僕にいろいろなものを渡してきた。

まず、簾。そして次に黄金に輝く林檎・・の置物。送つてくれた人達がありありとわかるのであえて名前は伏せておくことにしよう。

だが、僕の誕生日プレゼントはこれだけでは終わらなかつた。最後に剣治が渡してくれた手紙には墨で、

「りべんじ」

とかかれていた手紙であったのである。

だが、今日見る気にはならなかつたのでそれは机の上において僕は立ち上がりお腹を満たすために部屋を出て行つたのである。

その後、寝る準備をしてから床にこいつもしていよいよひいたつ布団を引いて準備をする。涼が布団を使つてゐるために僕の分の布団はもうないので仕方ないことである。だが、今日はこいつもと違つて布団で寝ることが出来た。なぜなら・・・

「せっかく大きな枕買つてくれたんだから一緒に寝よう。」
と涼が言つてくれたからである。

・・・・・・・・・・・・・・

「・・・少々ショックを受けましたが今回の話はむかつくべりいの話だね。」

「・・・まあ、不本意ですが今回まことにあつたらおしおきとやらが必要のようですわ。」

「・・・まあ、本意ですが今度時爾様にあつたらおしおきとやらが必

「・・・・・まあ、せいやうに頑張つてくれいね。」

「・・・・・絶対に今度出でやるから皆様それまで首を長くして待つててくださいね。」

「・・・・・あ、せいぜい頑張つてくれいね。」

わのじきつ はびばますでい（後書き）

今回、更新遅かったの申し訳ないです。次回は出来るだけ頑張つて早く出したいと思います。

やのじゅうこひせーとかこちゅう

涼と僕の誕生日の次の日のことである。その日は朝早くから起きて朝食を作っていた。

まあ、先程まで隣にいた涼の幸せそうな顔を眺めていても悪くないと思っていたがそれは考えないでおきたいと思う。安眠枕が聞いたのかいびきは書かなくなつた。だが隣に女の子がいたのでなかなか眠ることは出来なかつた。

僕はあぐびをしながらフライパンの中で転がるウインナ を眺めながらそんなことを考えていたのであつた。出来た目玉焼きとウインナーを皿に盛り付け、ご飯をついだ所で扉が開く。

まず剣治が先に起きてきてあいさつをして、自分の席につく。そして次に涼がすつきりした顔で僕にあいさつをした後、意味ありげにこんなことを聞いてくる。

「時雨、昨日はよく眠れたかなあ？」

その日は何か期待しているようだが僕は正直に答えるしかなかつた。

「うへん、ちょっとベッドが狭かつたから辛かつたかな。」

そう言つてから自分の席（剣治の前）に座りお茶を口に含む。剣治は既に朝食を半分ほど食べ終えていた。

「やつこひせーとかこちゅう」とじゅなくして、もしかしたら私の体に何かした?」

口に含んでいたお茶を盛大に剣治に吹きかける。案の定剣治は顔

からしづかへをほたぼたならしながら僕を元氣でこる。

「…………時雨君、朝からなに吹き出してんだい。僕が殺菌作用のあるお茶まみれになってしまったじゃないか。これがばこさん んだつたら小さくなつていたといひだよ。」

「え、」めん。「

「今更動搖するけどじやないだろ。」

そんなんこんなで謝りながら登校の準備をする。

涼はまだ中学三年なので学校自体が違うので途中まで送つていいくことにした。そして今日は珍しく満さんがやつてこないのでいたつて平和な朝の登校時間をする」せると思つたが・・・・。どうやら僕の考えが間違つていたようである。涼とわかれで剣治と学校に向かおうとする後ろから落ち武者のような声が聞こえてきた。

「…………時雨君、いつの間にあんな竹刀娘と仲良くなつたのかなあ・・・・・」

ぞくづとしながらも後ろを振り返つてみると満さんがいらっしゃるところのが確認できた。

「あ、あの子はそのあ・・・・・・」

僕はじどりもどりになりながら答えたのだが、朝のこともあり変に涼を意識してしまいなかなか答えることが出来なかつた。剣治に助けを求めるときにやつと笑いながらこつちを見ている。

「…………時雨君、僕は今日学校をきれいにするために早く学校に

行くことにしたよ。僕の体は殺菌作用のあるバリアが護ってくれているからね。』

そんなことをいつて走り去ってしまった。その後僕が何とか事実を踏まえながらも嘘みたいな話をして何とか満さんをなだめて成仏（正常）に戻すことが出来た。しかし成仏させる時間はかなりかかり、気がつくと昼食の時間になっていたので剣冶と共に弁当を食べることにした。そして突然校内放送が鳴り響く。

『えー、皆様、生徒会長様が長い修行の末にお戻りになられました。これから生徒会長様のありがたいお言葉を皆で泣きながら聞きましょ。』

・ · · · ·なんじゃそりゃ。

そしてスピーカーから流れてくる声にはびこか聞き覚えのあるような声だったがまず間違えることのない真実がある。

『ほん、皆のもの久しぶりだな。私ことベリル・リナはこのたびよつやくこの学校に戻つてくることが出来た。』

廊下では『べりるさまバンザーイ』と叫んでいる生徒がかなり多い。しかしこの声はどう考えたつて女の子の声である。ここはまだ男子校なのではなかつたのであらうか？

『 · · · · · しかしこいつもより帰つてくるのが遅くなつてしまつたようだ。口調が変わつてるので話しづらいのここからは普段どうつに振舞わせてもらおう。』

「へん、そういう『どこかで聞いたことのある名前である。だがこんな古臭いしゃべり方をする知り合いをもつていただろうか？思

い出せないのは単に僕の脳がボケてしまったからだろう。

『…………おーまつまつま。みんなのもの、喜びなさい。私が来たからじつはーの学校を共学になんかさせないわ。なぜなら私は今まで一度しか負けないからね。』

「…………付き合こきれないね。時雨君、満さん、今から急いで放送室に行こう。」

僕は微妙に行きたくないような感じがするので嫌だつたが一人に手を取られ引きずられるような感じで校舎を走つていったのである。途中廊下に立つている生徒は僕を見ても逃げずに何か言つているようだ。

「お前もそろそろ年貢の納め時だな。」

そんなことを言つてこるのが過労時で聞こえたぐらいなので後の発言も変わらないことだらう。そんなこんなで放送室の前に立つたのはいいが今日はどうやら厄日のようである。不適に笑う二人に囲まれて腕をつかまれ思いつきり放送室に放り込まれた。

「「あとのひみじやー。」「

後ろで閉まる扉からそんな言葉が聞こえてくる。そして僕はマイクに向かつて話している人物の足元に転がつているようである。見上げるとそこにはやはりどこかで見たことのあるような顔が今度は僕を見下ろしてくる。

「おーまつまつま。ようやくあえたわね、天道時 時雨。今度は負けないわよ。」

はて、やはり記憶が不鮮明であるから思い出すことが出来ない。こうじう場合は本人に確認を取るのが一番である。しかし、失礼があつてはならないので、僕がもてるだけの知恵を使い目の前の人物に話し掛ける。

「すいません、あなたは誰ですか？」

「やあ、まいったね。部屋の空気が一瞬のうちに凍つたのを肌で感じるのは生まれて初めてだ。

「…………私を忘れたとその口は言いましたか？」

や、やばい。このままでは僕の命にかかることになるかもれない。こつなつたらやけだ、感を頼りにしていくことに越したことはない。しかしそんなことをしている余裕はないよつだ。

「…………私は綺麗かしら？」

あ、思い出した。」の人あのときの神様だ。

「まあ、確かに綺麗ですね。」

ベリルさんからは強烈な光が放たれており、神々しいのは嫌でもわかるといつものである。

「ふふふ、今度はこの前みたいに無様に負ける気がしないわ。」

やれやれ、僕には人を傷つけて快感を覚えるような変な性格ではない。今回も悪いがさつさと氣絶してもらつたとした。

『私は、紅き悲しみと蒼き哀しみを背負いし天界と魔界を統べるものの。』

世界が紅と蒼に包まれる。久しぶりに使つたのでなんとなく家に帰ってきたような感覚に襲われる。

「…………今回も悪いですが氣絶してもらいます。」

「やつてみなわつよ。」

黄色い光と紅と蒼が混じつた光（簡単に言つなら紫。）が激突。今までたつていたベリルさんはドサリと床に倒れ伏す。どうやら今回も勝つことが出来たようなのでほつとする。

「…………悪いけど今日は悪戯せてもうりますよ。」

近くに転がっていたサインペンを片手に僕は氣絶しているベリルさんの顔に芸術的？な落書きをほどこしてこれまた都合よく転がっていたポラロイドカメラで写真を撮つた。

一応言つておぐがそれ以上の事は何もやつてないといつてもいい。ちゃんと写真をとつた後は顔のマジックは消しておいた。また何かいちやもんをつけられたら僕は困ると思つから念の為である。

既に一人は教室に帰つてしまつやく到着した僕を冷え冷えする目で眺めた後話し掛けってきた。

「やれやれ、負けてあげればよかつたの。」

「ナニだよ時雨君、たまには負けてあげなよ。」

その後、家に帰り着くまでその口撃は続いたことを記しておく。
さて、その頃よつやくめを覚ました生徒会長さんは夕焼けに染まる
空を見上げて悲しそうな溜息をついていたのであった。

「ああもあつもつ負けてしまつとは全く想像もつかなかつた。」

そしてもつ一度溜息を出すが今度の溜息は悲しそうな感じはしな
かつた。

「・・・・私の体に傷をつけずに気絶だけさせるなんて優しい奴
のままですわね。それに私が気絶している間何もしなかつたなんて
なかなか見所のある奴ですわ。」

まあ、時雨の要領のよさがなんとなく滲み出でているような気がし
ないでもないが今回の生徒会長撃破のつわさは瞬く間に広がり各地
(教室)から白旗をあげる者達が多く出ていた。つまり、このこと
により徐々に共学の動きは激しい勢いを増していくのである。

やのじきひこ せーじかこちゅう（後書き）

なんかやるきないみたいな題名になつたのでお詫びしておきますね。さて、出てきたけどあっさり負けてしまつた生徒会長。満を帰しての登場でしたがあまり活躍できてなかつた気がしますね。ということで出来たら今度はせいとかいちょうをもう一度登場させて何とかしてやりたいと思います。まあ、そろそろ終わりに近づいているような雰囲気がありますが最後は久々の時雨のどじが發揮されておしまいにしたいと思います。

やのじゅりて 終わつからぬあるかもしけなに物語（前書き）

ひとつ最後になつてしまつました。あつたつしやすめてこのと田
いますが今まで有り難いござりました。

やのじまつて 元ひきめ 終わつから始まるかもしけない物語

お風呂に入った後、一の前もらつた果たし状らしきものを開けてみた。それにはこの近くの神社までの地図がかかっていて、日付けは明日の夜、PM9時である。

「うらやましいね、君はもじもじじゃないか。」

もう言って近づいてくる彼の中には新たな手紙が収まっている、その手紙を差し出すということは間違いなく僕宛の手紙であることは間違えることのない真実のようだ。

差出人は生徒会長。用件は共学の事を話し合つて会議を開くことになつたようである。

「一の前君が生徒会長を倒してしまったから渋々ながらも共学について話し合ってくれるみたいだね。」

「・・・しかしまあ、明日の朝からなんてベリルさんは『気が早いな。』

どうやら明日もまた少々大変な日々を送らなことだけないようなので今日はいつもより早いが寝ることにしよう。そしていつものようにじたつ布団を引いているとお風呂から上がってきた涼が不思議そうな顔をして僕を見ている。

「何やつてんの?」

「ん、寝る準備だよ。」

まだこたつを出すには早い季節だと思うので寝る以外にはこの布団の活用性はないと思つ。そつとと布団を強いて床に転がっている安眠枕を買う前に涼が使つていた枕を頭の下に持つていぐ。

「そ、そこで寝なくてもベッドがあるじやん。そつちで寝なよ。」

そう言つてくれるのは嬉しいがそもそも言つてられない事情がある。さすがに一人で寝るのはきついし、ほとんど密着状態になつた挙句に目の前には涼の寝顔があるので。いびきはかかなくなつたが、これでは再び寝不足状態に陥つてしまつのは必死である。

「狭いから無理だよ。それじゃあオヤス!!。」

さつさと眠りうとしたが寝ることは出来なかつた。剣冶が扉を開けて大きな布団を持ってきたからである。

「そ、時雨君、これで狭くないだらう。」

全くもつて都合のよろしい少年である。その顔にはあのときの顔（お茶をかけてしまつたときの事である。）が浮かんでいたのである。

「さあ、これで何も文句はないだらう。それじゃあ僕はこれで失礼するよ。」

あつという間に僕をどかして布団を敷いて部屋を立ち去つてしまつた。後に残つたのはぽかんと口を開けている僕と少し顔の赤い涼だけだ。

「・・・・」、これなら大きいから心配ないよね。じゃあ寝よう。

「

…………。」

れつあと布団にもべつこんだ涼の後を溜息交じりに迫つて僕も布団の端っこに进入る。まあ、当然の行為だ、年頃の女の子と同じ布団に寝るなんていけないことであろう。

そんなことを考えながら皿をつぶると何かの気配がある。僕の隣からであり、離れていたはずの涼が僕の隣にくつっこっているのだ。

「…………もつとくつこしていく？」

そんなことまで言つて来る。

「だ……わかったよ。今日だけは涼の人形になつてあげるよ。」

黙黙とこねうとして涼の顔を見るとそれは不安な顔をしていたのでついつい承諾してしまつた。僕は甘い人間なのは間違いないことだろうなあ。多分、チョコレートケーキ並に甘いんだろうな。
・・・・・それより気になることがある。だが今日はまだいいだう。

「共学になつたらこの学校からになくなるの？」

いやあ、まさかばれるなんて知らなかつたな。

「うそ、家族がくる所に帰るんだよ。」

「…………。」

そのまま涼は静かに眠ってしまった。僕もそのまま睡魔に襲われてあえなくダウン。しかしこの頃から異変は始まっていたのだろう。そんな事に僕は気がつかずにのほほんと生活を送っていたこととなる。覚えている人がいるかどうかはわからないが僕は僕が天使になつた理由を完璧に忘れていたのである。

そして朝、いつもより早くおきた僕は朝食を食べに行こうとして体を起こそうとしたが涼がいまだにプロレス技をかけるようにしてしがみついているのを見てあっさりまた横になつたのである。そう、この生活は長くは続かないものであり、何かの偶然である。

それから涼が起きるまで僕は涼の顔を眺めていたのであった。

・・・・・ その為、学校にいくのがかなり遅くなつて遅刻してしまつたことをかいておこいつ。

「では、これより共学についての会議を始めます。」

そして、今会議を始めたのはいいのだが会議室にいるのは三人だけである。僕とベリルさん、剣冶だけである。

「始めに多数決を取りたいと思います。共学に賛成する人は手を上げてください。」

なぜかけんじが仕切っているが気にしないでおこいつ。結果は満場一致で可決。

「・・・それで、これで理事長の言つことは解決したも同然だ。だがまさかこんなに早く解決するなんて思わなかつたな。」

独り言なんかわからないがそんなことを剣治が言っている。その顔には苦虫を噛み潰しているようである。

「やはり何かおかしい。時雨君、今からひょっと行きたいといひがあるからついてきてくれたまえ。」

僕の手を掴み剣治は会議室を出て行つたのである。

それからあつた事は様々な出来事であつた。そして意味ありげに言わせてもううと僕の不注意のせいでの世はリセットボタンを押したゲームのようになつてしまつたことを簡潔に書いておきたい。

まず、天界の陰謀を知つた僕とけんじはこの世のリセットボタンを奪い逃走。だが、転んだ拍子にあやまつて押してしまつたのである。

そりやもつ、おすとフチフチなる箱などを買つとよく付いてくる衝撃を吸収すると思われるビールのよつ・よつ・よつ。

そして僕自身にもリセットが掛かつてしまつたようである。

まあ、皆さんあまりにもあつけないですがこれで一応終わりである。また何かの偶然で会えたら良いこという事にしておいてくださいな。そして僕の新しい生活はこのように始まるのであつた・・・・・。

「今日は彼、天道時 時雨君は引っ越しです。」

完

やのじゅりて 終わりから始まるかもしぬない物語（後書き）

さて、あつやつと完結的に終わってしまいましたね。じつにまあ、さつぱりしそぎてますがこれにて終わりですね。またどこかで時雨たちが活躍する日々がありましたら宜しくお願ひしますね。そん時は何がどうなつて世界が消えてしまつたかもう少し詳しく書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8547a/>

アンノウン・エンジェルズ

2010年10月10日01時35分発行